

1. 東京喰種～二人の死神～

0528 (零伍貳捌)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、とある人が朝起きて喰種になってしまったなら、その人はどのような運命を辿るのか？

死神と呼ばれた元人の二人の喰種のお話。

※有馬さんと金木くんはこの題名には、(作品には出て来ますが)一切関係がありません。ご了承ください。

目次

第一章 事の始まりと突撃

1. とある一日 (平日 version)	1
2. とある一日 (休日 version)	5
3. リゼさんとの思い出	14
4. 私のルーツとは?	20
5. 夢の中の戦い	28
6. 仕事を頼みに……。.	38
7. 「Antares」の人たちとの出会い	43
8. 自分の再確認	52
9. 質疑応答	59
10. CCGに突撃①	65
11. CCGに突撃②	69
12. CCGに突撃③	73
13. CCGに突撃 反省会編	78
EX 1. 捜査官達の会話	83

第一章 事の始まりと突撃

1. とある一日（平日 version）

私は目が覚めた。そして、いつもの通りに顔を洗い、いつも通りにトイレに行き、いつも通りに服を着替え、そしていつも通りに飯を食う。但し、一番最後のは昔のいつも通りではない。ある時から食べ始めていた食材だが、最近ではなくてはならない食材になってしまった。それはズバリ、人肉である。そう、私は喰種だ。最近の事件でよく出てくる喰種である。ネットとかで、「大喰い」とかいう名前がよく出ていたが、その「大喰い」とは知り合いだ。まあ、仲については後で記す。

まあ、そんなことどうでも良く、さつき、おかしなことをいつたの覚えているだろうか？「ある時から食べ始めていた食材だが、最近ではなくてはならない食材になってしまった。」それはズバリ、「人肉」である。すなわちここから2つのことが読み取れるということがお分かり戴けるだろうか？

1つ目、私は元々生粋の人間であったということ。ちなみに私はいつ喰種になったのかは覚えていない。詳しく言うと、半年前、夕方「お遊戯」（詳しい意味はこのあと説明する）をしようとして、女の人を襲ったのが最後の記憶で、次にある記憶は、朝目覚めたところ、つまり、10時間ぐらい記憶がない。ただし、自分は喰種になってしまったこと、喰種とは何かということ、生きるためには何をすべきか、など大体のことは何故か知っていた。（まるで、新たに備わった本能のよう。）つまり、人肉を食べなければならないのは何故か知っていたということである。

2つ目、喰種になる前から人を食っていたのだ。私は、子供の頃から、血の味が好きだった。だから、喧嘩は好きだった。私は、裏側のチンピラ界では結構、名の知られたものだったらしい。それで、学生の時、バスケット部に入っていたのだが、一ヶ月ぐらい部活をサボったことがある。その時に出た自分の血の味を思い出すと吐きそうになる。

不味かったのだ。要は、血の味がわかるようになってしまったのだ。そんな衝撃的な出来事があったりしながら、なんだかんだいって平和(?)に過(こ)して高校2年生になった。私は「学校始まって以来の天才」とされていたから、医者になろうと思った。ただ、裏ではバレないようにチンピラに喧嘩を売ってぶちのめしたり、金を巻き上げたりすることはまだやっていった。ただ、飽きてきてしまったので、何か打開策を考えていた。そうしたら、ある時チンピラと喧嘩していたら、殴り殺してしまった。その時、思ったこと、「愉しい。」

その時から、人を殺すのに楽しみを覚えてしまった。そして更に色々あり、医学部では一位の成績だ。それで、今度は殺したその場で人間を解剖するのにハマってしまった。そして、いよいよ肝臓を食べてみようと思いい立ち、食べてしまった。自分のお気に入りは、王道だが、目の周りの筋肉が好きだ。

つまり、「お遊戯」というのは、人の体で遊ぶということだ。とは言っても今までに人である時、殺したり遊んだりした数は、5体だけだが。

長くなってしまった。というわけで、ブルーマウンテンと角砂糖状のもの(これは後々のやつ説明する。というか二話に記す。)を朝ごはんに食べる。ブルーマウンテンと角砂糖状のものは別々にして食べるのが自分のこだわりである。とは言ってもたまには溶かして飲むこともあるが。

そして、普通に大学に行く。1人の学生として、学業を一生懸命こなす。私は、さっき記した通り医学生だ。

昼食に弁当を食べる。みんなお分りかと思いますが、喰種は人間しか食べられないわけだから、弁当を食べるのはどうかと思うかもしれない。しかし、人間界の近いところにいる喰種は、胃の中に飲み込んで、消化が始まる前に吐き出す、ということをしているらしい。これは、「大喰い」に教えて貰った。というわけで、食べたらず早く出し、

元の席に戻る。

なんやかんやあって授業終了。食料調達に自宅に行く。自宅から狩場まで行く途中、体の形(身長とか、たまにデブになったりする。要は、シークレットブーツを履いたり、服の中に風船を入れたりするということだ。)を変えて別の区のところに行つて、飯を調達しに行つた。そうしたら私が漁りに来るのをよく思わない喰種共が、4匹ほど襲いかかってきた。

「デメエ勝手に人の縄張り入ってくるな!死ね!」と言いながら。

めんどくさいなと思いつつ、適当にかわしてみぞおちに一発、拳骨。

そいつのお腹のお腹から、「メリッ」という音と、少し液体を出して倒れる。

ひとりは、赫子で攻撃してきたので、赫子を引きちぎる。

んで、根元の方の残っている赫子を引つ張つて引き寄せ、そして首に一発、手刀を食らわせる。

「ボキッ」という音がしたけど気にしない。

めんどくさくなってきたので、突っ込んできた奴に回し蹴りを華麗に食らわせ、足で腹に穴を開ける。

足を抜いて外に出しておく。

そして片付けて(道の横の人目につかないところに寝かせておく)、帰った。飯を調達する気にはならなかった。まあ、貯蔵しているものもあるし。ちなみに人数が1人足りない気がするの、気のせいでしょう。逃げたわけじゃないと思っておきましょう。まあ、あの三人組は所詮その辺のチンピラと同レベルでしょう。

体を元に戻して帰宅。家でネットでニュースを見る。「美食家達のやり方かね、こりや。」

ニュースで表面的なことを見てから友達から送られてきたCCG

のサーバーのデータを少し覗き見る。『目だけ消えてる人間発見』か、最近の美食家の好みは目か。』『襲ってきた四人組の喰種の三人はCCGにより処理された』か。まあ、襲ってくるのが悪い。『犯人は不明。多分喰種同士の仲間割れだろう。』か。仲間ではないけどね」

そして、飯を食ったり、(角砂糖状のもの)風呂に入ったりした後、寝る。神様がいるとしたら、コーヒーと睡眠は、人間と平等に与えてくれたものなのかと思うほど幸せになれるものである。

これがいつもの平日の過ごし方だ。

そういえば、名前を言っていなかった。私は「賢剣 凱(けんけかい)」だ。

2. とある一日 (休日 version)

朝、目覚める。もう時刻は10時半だ。いつも通りに顔を洗い、いつも通りにトイレに行き、休日用の動きやすい黒い服を着て、そしていつも通りに飯を食う。もちろんブルーマウンテンと角砂糖状のものを朝食べる。そうしたら、今日は食料調達日和(すなわち、曇り。晴れだとは見つきりやすいし、雨だと、白鳩の匂いが嗅ぎ取れないから。)なので、CCG本部の区へ行く。

んで、CCG本部の区に着いた。人気のないところで喰種捜査官発見! 喰種捜査官は、鍛えているので、とても美味しい。早速仮面をつけて、行く。

「白鳩さん、白鳩さん、調子はどうですか?」

「君、白鳩なんて言い方どこで知ったのですか?」

「大喰いに教えてもらったけど。」

「大喰いを知っているのか? お前もしかして喰種か?」

「正解! では私は誰でしょう?」

右の手のひらから長さ1.5メートルほどで、刃が1メートルほどの大鎌、左の手のひらから手首からの長さ30センチメートルほどのナックルを出す。

説明しておく、これは赫子らしい。ただ、出ている場所が場所なので、種類がわからない。ただ、素晴らしいことに、この赫子は様々な武器に変化して攻撃できる。とても強いので好きだ。

「誰だ?」

「お前も知らないのか。まあ良い。」

喰種捜査官の取り出した携帯電話を素早く盗り、破壊した。

「しまった! 仲間を呼べない。仕方がない、一人で倒そう。」

振り向いて、アタッシュケースから、1mぐらいの長さの剣を出す。

「早く死ね!」

馬鹿だろ……私をそんな簡単に倒せると思っているのか。そんな

喰種捜査官に一言。

「世の中そんな甘いものだと思っっているのかい？まあいい、そっちらどうぞ。」

喰種捜査官は、横に剣を打ち込んだ。

しかし、ナツクルで受け止める。

すかさず、大鎌で首を切り落とそうと一振りした。

しかし、喰種捜査官はそれぐらいの攻撃で死なない。

つまり、後ろに飛び、間合いを広く取った。

ならばとこちらが間合いを詰める。

喰種捜査官は、ここぞとばかりに、叩き斬るように上から振り下ろした。

しかし、予想外なことに、ナツクルが伸びて、腹にグサリと一刺し、さらに追い討ちをかけるように、大鎌を両手首に振った。

喰種捜査官の剣、そして手首から先を切り落としてしまった。

痛がっている喰種捜査官に間合いを詰め、手のひらからの赫子を引つ込める。

そして私は一言。

「そんなんで私を倒せると思ったか？ふっ、私の武器も一応赫子なのだから、伸びるかもしれないなかったのだよ。しかも、手のひらから武器を出すだなんて、私以外ないはずなのだから、油断しちやダメだよ。まあ、すぐに楽にしてやるから。」

そう言って、背中から赫子を出した。その赫子は、少し変な形をしていた。まず、体から出ているのは、まるで植物の茎のようで、先の方は、花のような、特にひまわりの形をしている。ただ、一箇所、茎に小さな引き出しが付いている。それは後で記すとして、兎に角、花のような赫子だ。しかし、花と大きく違うのが、ひまわりの小さな花がある部分が、空洞で、歯が付いているという点である。（要はマリオのパッ○ンフラワー）これで、人や、喰種を食べるとエネルギーを凝縮することができる。人を食べると、角砂糖状のもの（つまり色は白い。）、喰種を食べると、黒糖のようなもの（つまり色は黒い。）になる。

角砂糖状のものは、食べると、砂糖の味がする。それで、1?の立

方体の形をしていて、1食分の栄養が取れる。(栄養の凝縮がなされると言うことだろう) ちなみに、人を一人食べると、90個ほど出てくる。ちなみに私はこれを、人砂糖とよんでいる。

黒糖のようなものは、喰種を食べるとできるもので、とても苦い味がする。でも、1食分の栄養が取れるわけではない。が、代わりに、赫子を安定させておくために、食べるものである。私は右手のひらからも、左手のひらからも、背中からも赫子を出せる。なので、とてもパワーを使う。そのために使うエネルギーではなく、赫子の維持に使う。(これを食べるととても赫子の動きが良い。再生もしやすい。)ただ、これは一人の喰種から、5つしか作れない。ただし、一ヶ月に5回食べればいい(基本的には。)ので、そこまで困らない。ちなみにこれは、喰種砂糖と呼んでいる。それらは引き出しのようなどころから引き出せる。

要は、どっちもドラゴンボールという仙豆のようなものである。ただ、今挙げた数値は、通常値で、大きな戦いなどをするときには、もつと食べたほうがよい。ちなみに、この赫子の名前は、「ブラッドフラワー」と名付けておいた。

話が逸れた。とりあえず、まず剣型のクインケを美味しくいただく。クインケで、喰種砂糖を1つ作る。そして、生で食べたい気分なので、目をえぐり、目の周りの筋肉を綺麗に剥がす。途中、悲鳴がうるさかったので、声帯も取り除いた。胸筋もえぐり取り、レバーとハツも取り出す(つまり、肝臓と心臓)。そしたら、そろそろ死にそうなので、残骸をブラッドフラワーでパクリと飲み込む。70個ぐらいの人砂糖が作れそうだ。取り出した部分は、消化しないように、ブラッドフラワーのなかで保存しておく。んで、服らしき跡を吐き出し、そして、ブラッドフラワーを引っ込める。

「今回も上出来だな。血しぶきが服についていない。ついでに、喰種も襲おうかな?」

そう決めたら、仮面を外し、別の場所へ向かう為に駅へ行った。

2区は、共喰いが激しくて、喰種を殺してもあんまりばれにくい。路地をうろちよろして人を生きが良いままブラッドフラワーで食べたら、早速後ろから襲いかかってくる縄張りの主が現れるはずである。ほら、早速、後ろから肩をたたくものが……。

「君、喰種だよね？」

「はい。」

「人の縄張りに入って食べるのは何事かな？」

「すいませんでした。」

「では、お詫びのしるしに、美味しそうなあなたは、おとなしく死んでくれますか？ 楽に死ねますよ。」肩から蝶の羽のような赫子を出して言う。

「そうきましたか、もちろん断らせてもらいます。」

「ふーん、残念だが仕方がない。では、苦しんで死ね」

相手は、赫子を羽ばたかせ、風を起こした。少し輝いている粉も飛んでいる。

突然だったので、風で5メートルほど飛ばされた。立ち上がろうとして、手を着くと、力が入らず、立ち上がれない。

「どうですか？ 私の赫子が作り出した鱗粉は？」

「なかなかですね。」

「だろう。ただ、3分ぐらいしか効かないようにしているから。弱そうだし、仮面もつけていないから死ぬ覚悟で食っていたのでしょうか？ 大丈夫。私が美味しくいただきますから。あなたを。」

「成る程、ただね、体がほとんど（・・・）動かないだけでね……」

右の手のひらから鞭を出す。

「左手は動かせないが、右手はかろうじて動くし、赫子も出せるよ。」
「へえ。すごい。が、それがどうしたのですか？ 右手しか動かないんですか？ まあ、一応、右手も使えないようにしておきますか。」

相手はまた、風を起こす。

しかし、こっちはこっちで鞭を振り回す。円が相手の方に向かうように。
うに。

そうするとどうだろう、風が打ち消しあって、風の流れが横になっ

ている。さらに、風が、相手の方に行き始めたではないか？鱗粉も含めて。

相手はクラゲのように倒れた。

「こう言う時に自分の鱗粉で体がしびれるとは……。」

「大丈夫。私が美味しくいただきますから。あなたを。」

「何故、私に効くとわかった？」

「簡単なことだよ。私がわざわざ3分毒が効くということは、毒が抜けてからではないと食べれないということだろ？ちなみに、仮面をつけてなかったのは、死ぬ覚悟だったからではなく、今から死ぬ人に顔が見られても仕方がないからだということだよ。まあ、最悪、迷惑かけなきや、喰種同士だったら顔バレOKだし。」

毒が抜けたので、相手の近くに寄る。

「おまえさん、私の体の中には赫子で作った毒が詰まっているのだよ？喰べる気かい？」

「もちろん。」ブラッドフラワーを出して言う。

「これで食べると毒とかいらぬものは全て除去されて消化されるから安心してください（ニコツ）。」

「Shit！」

「ではさようならー！」

鞭を首に巻き、キユツと絞めた。そうしたら、強くやり過ぎてしまい、首がポトツと落ちた。それで、ブラッドフラワーで美味しくいただいた。喰種砂糖5つ。一応その場で喰種砂糖を1つ摂取しておく。

疲れたので、地元の方に戻る。帰り道に珈琲店があったのだが、たまにそこからする匂いを嗅ぐととても良いコーヒーの香りがするの、今度行ってみようと思った。名前は「あんでいく」というらしい。まあ、でもとりあえず今日はバーに行くが。

もう時刻は20時だ。なぜか夜、閉まっていることが多いと噂のバーに着いた。（なぜかというと、俺のような来客がいるからだ。）店の看板には「Antares」と書いてある。店の扉には、「clos

ed」と書いてある。周りに誰もいないことを確認して店内に入る。
「いらつしやい、死神（デス）。」

「よう、マスターの蠍王（スコープオンキング）。」

「今日は久しぶりに二人とも来ているよ。もちろん一人は来てないが。」

「ストレート！」

「ストレートフラッシュ。」

「はあ？イカサマしたでしょっ！」

「……。」

「よう、鳥（クロウ）と皇帝（エンペラー）。」

「よー死神。ストレートフラッシュなんてそうそう簡単に出ないよね？ね？ね？」

「……おう。」

「鳥、落ち着け、こいつがするわけないだろ。しかもポーカーなんて真面目にやればほぼ運なんだから。」

「真面目にやらないってどういう？」

「私と金を賭けてやればわかる。」

「イカサマじゃん！それ！」

「……。」

「皇帝いつも通りだな。」

「いつも思うんだが、俺、皇帝なんてキャラじゃないんだけどな……。」

「仕方ないじゃん。CCGが君の肩に乗せている大砲と君の帽子を見て、帽子がナポレオンがつけていそうなものだったのと、ナポレオンは、大砲を使った戦争が得意だったから皇帝の名がついたのだから。」

「私なんてあの薄汚い鳥よ、鳥！」

「落ち着け、鳥。」

「……。」

とりあえず、カウンター席に着く。それに倣うように鳥と皇帝と呼ばれる女と男は、ボックス席から蠍王と呼ばれる男の近くのカウンター席に着く。

「そういえば死神、今日も暴れたの？」

「CCG捜査官一体と、蝶型の赫子を持った喰種一体仕留めた。マスタ〜レッドワイン1つ。あっ、そういえばこれもよろしく。」

ブラッドフラワーを出し、そこからレバーとハツを出す。

「はいよ。」

蠍王は料理を始めた。

「確か蝶型の赫子を持ったやつって2区の有力者じゃない？Bレートだけど、実質Aレートのような強さのやつじゃない？」

「知らん。」

「ってかなぜそんな2区の中の小さな実力者の話を知っているんだ？」

「私、顔広いから。」

「さすが烏。」

「あと、暴れすぎは良くないよ。」

「ああ。」

全く、烏は喋るのが好きなようだ。

「皇帝はどう？」

「最近は暴れていない。ただ、2週間ぐらい前に良さげな場所で白鳩を見つけたから撃った。」

「おおーぱちぱちぱち。」

「さすがだな、皇帝。」

「レバーのステーキとハツのソテー、完成しましたー。」

皿から、肉の香ばしいにおいがする。

「おおーうまそうー！」「きたか……。」

「一人分しか作れなかったが許せ。」

「私が狩ってきたものだしいいだろ、二人とも。」

烏は不満そうだが頷き、皇帝も静かに頷いている。

そして、色々喋りながら食べ終わると、烏が口を開いた。

「そういうえば、あなたの師匠のリゼさんは？」

「そこだけ本名？大喰いと呼べよ。そういうえば最近1週間ほど会っていないな。」

「なんとなくあの人に大喰いという名が合わないんだよね。それで

『本好きの子を見つけたらしく、本屋巡りデートした後、美味しくいた
だくらしいよ。程よい肉付きらしいよ。』つて言えって言われた。」
「ふーん、なぜわざわざどうでもいい標的なんぞの情報を俺にやるの
か?」

「誰かに言つとけとか言われたらしい。」

「ふーん。リゼさんが誰かに指図されるなんてね。」

「そもそもあなたと仲良くしているのもおかしいと思うんだけどね。
いくらあなたが強かったとしても。あの人の世間一般の噂としては
一匹狼の喰種らしいからね。ね?皇帝?」

「……知らん。」

「とりあえず、あなた、気に入られているのよ。」

「ふーん。まあ、あの人の弟子だしね。」

「だから、あの人が弟子をとること自体がおかしいのよ!」

そうこうするうちに、マスターがグラス4つと赤い液体が入った瓶
とトランプを持ってきた。

「じゃあ、締めにはワインとポーカーでもやろうよ。ジョーカー入り
で。」

「もちろん。負けた分を取り返すわよ!」

「……さっきの金賭けてない。」

「やろうぜ。大歓迎だよ。」

もう1つ、ちなみに、三回やって、全部私が勝ったとき。「イカサ
マわよ!それ!ロイヤルストレートフラッシュ3回も出すだなんて
!」と言われたのは気のせいだろう。」

「そういえば、胸筋が残ってつからしておくよ。三人で食っていい
よ。おれ帰るわ。」

「やった。肉!じゃあね。」

「さようなら。」

「大喰いによろしく伝えておいてくれ。」

ちなみに紹介が遅れたが、蠍王(スコープオンキング)と、鳥(ク
ロウ)と、皇帝(エンペラー)は、3ヶ月半ぐらい前に、この店に来
た時知り合った。(といっても、蠍王は、この店のオーナーだが。)つ

まりこの三人は飲み仲間だ。まあ、本当はもう一人、侵食者（ハツカー）と呼ばれる人がいるが、引きこもりなので、今までここでは2回しか会ったことがない。が、とりあえずこの四人とはまあまあ仲がいいと自負している。

そして家に帰る。例のごとくCCGのサーバーのデータを見ると、「喰種捜査官一人行方不明、あたりに散乱する血とクインケがなくなっていることから喰種の仕業か？」という内容の書類があった。あと、蝶型の赫子を待つ喰種を検索したら、蝶々（パピヨン）というのが該当した。Bレートで、あの地区の有力者の一人だったらしい。（2区とかではなく、もっと狭い地域での話。）

眠くなってきたので、風呂に入って、そのあと寝る。

まあまあ充実した一日だった。

3. リゼさんの思い出

昼、カップにコーヒーを入れていた。

私は、前の、バーでの鳥の話を思い出していた。

『そもそもあなたと仲良くしているのもおかしいと思うんだけどね。いくらあなたが強かったとしても。あの人の噂としては一匹狼の喰種らしいからね。ね？皇帝？』

『とりあえず、あなた、気に入られているのよ。』

どういことだろうか？言われてみれば、あの人は、なぜ私に接触してきたのだろうか？なぜ、私に様々なことを教えてくれたのだろうか？

そもそもの出会いは、あの半年前の記憶が消えた時の朝のことだった。

朝起き、着替えを済ましてテレビを見ていたら、家のチャイムがなった。

「はい。」

「こんにちは、賢剣凱さん。私は神代利世といいます。取り敢えず、家に入れてもらいたいのだけども。」

「あのーどちらさまですか？」

「あなたがまだ知らない人ですよ。」

「非常識ですね。知らない人をそんな簡単に家に入れると思いますか？」

「では、喰種のことについていろいろ教えてあげると言ったら？また、私の俗に呼ばれる名が、『大喰い』だったら？」

なぜ、私を知っているのか？、なぜ、私が喰種になったか知っているのか？、なぜ、私の住所を知っているのか？、なぜ、私のところに「大喰い」が訪ねてくるのか？「大喰い」といえば、もちろんたくさんの肉を食べていると言う噂の男だったはず。色々不思議なことは多いが、喰種については、あまりよくわかっていないし、面白そうだった。

たので、取り敢えず中に入れた。

「喰種は、基本的に飲み物はコーヒーしか飲めないよ。他のワインとかビールとか飲めないから。」

残念。もう二度とワインは飲めないのか…。

コーヒーをリゼさんに渡したところで、リゼさんが口を開いた。

「改めまして、こんにちは、いや、おはようございます。私は、神代利世といいます。又の名を、「大喰い」といいます。」

「賢剣 凱といいます。早速ですが、ご用件はなんでしょう?」

ぶつきらぼうに言ってしまった。

「取り敢えず、喰種の概要についてはご存知ですか?」

「えー、喰種とは、人の肉を食べるとでしか生きることのできない生物で、基本的に一ヶ月に一人二人食べなくてはならない。人と比べ、Red Children Cell、すなわちrc細胞の量が多いのが特徴とされている。しかし、それは自分たちでは作れないので人を食べて手に入れている。また、rc細胞により、赫子という捕食器官を作り出すことができ、喰種内で喧嘩したり、単に人を食べたりするのに使う。ちなみに、普通の武器では、喰種は、体が傷つかない。ただし、目のあたりは唯一人間の作った針でも貫くことができる。喰種を野放しすると、人間は絶滅するので、東京に関しては、CCGというグループが、喰種殲滅にあたっている。赫子から作った武器で戦う。その武器をクインケという。」

「まあ、満点。医者的な発言ね。特にrc細胞の話。一般市民も知らないよ。しかし、それらは理論的なものばかりで、実践的ではない。あなたはその知識だけで、この世界を生き残っていくつもり?例えば、人間の唯一飲食できるものは、コーヒーだということ。喰種の間で共喰いをすることもある。例えば、何区何区とあるが、ルールを守らないと追放されたり、攻撃されたりする。私がされたように。だから、自由に生きるには、強くならないといけない。仮面をつけて戦わないと、一般市民にすぐばれるということ、CCG捜査官のことを『白鳩(はと)』と呼ぶこと、喰種の強さの測り方はどうするか?。実践的にはあなたの赫子はどんなタイプなのか?赫子の出し

方は？戦い方は？など、あなたはまだ知らないことだらけでしょ？」
「は、はい。」

「この場所から、あなたのただならぬ力を感じたので、鍛えたらどれだけ強くなるかなーと思つてね。知識ももちろん必要でしょ？」

「は、はあ。」

「取り敢えず、色々君に教えるから、これから何度も君の家に来るよ、よろしく。」

「宜しくお願い致します……。」

そうして、早速様々なことを教えられた。まあ、教えてもらった話は置いておく。でも、やっぱりびっくりしたのは、実践であった。

まず、地下に連れて行かれた。

「ここは、昔喰種が、潜んでいた場所。通称24区と呼ばれているところ。ちなみに、地図は後で渡すよ。地図無いと、とても入り組んでいるので、帰れないよ。とは行つても全域の地図はないけどね。広過ぎて全てを把握している人なんていないと思うけどね。」

「はい。」

「では早速赫子の出し方をおしえてあげるわ。」

そう言つて、リゼさんは赫子を出した。

「こうやって出すんだよ。わかった？」

「全くわかりません。」

「でしょうね。だから、こうやって教えるのだよ。」

と言いながら、赫子を私の方に向けてきた。つまり、攻撃してきた。嘘だろ……私は早速死んでしまうのか？」

当たらないように逃げる。これを約30秒ほどしていたが、いよいよ追いつかれそうになった。そしてであろうことか、こけてしまった。私の真正面にリゼさんが来る。

そして、私に赫子を差し込もうとした。その時私は思った。

(まだ死にたく無い。生きたい。)

そうしたら、まるで右手に、体のパワーが集中していくような感じ

がしてきた。すると、右手のひらから、赫子が出てきた。そして、その赫子は、大きな盾を創り出し、リゼさんの赫子を受け止めた。そして、左手のひらにも同じようなものを感じ、左手からは、スタンガンが出てきた。また、背中の方にも同じような感じがして、ブラッドフラーワーが出てきた。その時のリゼさんの顔はとても印象深かった。その顔はまるで、何かを確信した顔でもあったし、喜びの顔でもあったし、羨望の顔でもあったし、驚きの顔でもあったし、恐れ顔でもあった。

「どうかしたのですか?」

「……。」

「大丈夫ですか?リゼさん?」

「……大丈夫だよ。取り敢えず、赫子というのは基本的には、このように感情が荒ぶると出てくる。今の感覚を忘れないように。」

「はい。」

また、喰種に実践を試みたりした。

まず5区に行って、うろちよろする。そうすると、何人かの喰種が襲いに来る。そうすると、リゼさんは、赫子を出して、一気に他の奴らの心臓を一刺しした。

「次はあなたの番よ。」

「はい。」

そんな打ち合わせをして、また歩いていると、また何人かの喰種が襲いかかってきた。まず、かがんで攻撃を避け、下からなぐる。1人KO。立ち上がり、一人に肘鉄。KO。そうしたら、右手から日本刀を取り出し、構えると同時に一人の体を切る。KO。(?)そして、残りの人には、赫子で襲ってきそうだったので、3振りぐらいして赫子を切り刻む。そして、首も切る。KO(とっていいのかな?)

「素早くやりすぎよ。これでは、赫子の対策、できないじゃない。速すぎて、相手方、一人しか、赫子で攻撃できてないじゃない?」

「殺されるかもしれない時によく言ってられますね。」

「大丈夫。あなたはそんな簡単に死なない人材だから。」

「なぜ、そう言い切れるのですか？」

「女の勘、かな。」

そうこう思い出すうちに様々な疑問点が見つかる。例えば、私の名前をなぜ知っていたのだろうか？表札に書いてあるのだろうかと言いたいのなら、それは間違いだ。表札には「賢剣」としか書いていない。なのにリゼさんはフルネームで僕の名を呼んだ。そして、喰種は、相手が喰種だとわかるのに「気」を使わない。あくまでも匂いとかで区別する。しかも、ただならぬ気なんて、私から発して無いと周りの喰種から聞いたら答えた。というか、なぜ、私が喰種だと、喰種になったと知っているのだろうか。しかもその日付けが、私が喰種になった次の日という。タイミングがあまりにも合いすぎでは無いか？というか、そもそも、私なんかを鍛えようとするなんて、リゼさんらしく無い。自分で成長しろという考えの人なんだから。（まあ、実際その通りの修行だった。）

そして、どうでもいいのだが、修行中、たまに出るあの表情、目は何なのだろうか？

コーヒーが冷めてしまった。コーヒーが美味しく無いのは死活問題だ。捨てて、また新しいのを淹れる。

またまた色々考える。

私を知っているということは、どこかで会っているはずだ。その時に名前がわかる何かをしたのだろう。ただ、そんなことをしたら覚えているし、そもそも、私は、周りをよく見ている人だから、一回でも会っているのなら顔ぐらいは覚えているし、少なくとも話をした相手は覚えている。あれ、そういえばリゼさんの後ろ姿がどこかで見たことある気がするが、なぜか思い出せない。それでは上の物覚えがいいという前提条件が崩れてしまう。まあいい。別のことを考えよう。

なぜ、私が喰種になったのかを知っているのか？普通に考えて2つ、私が人の時も知っていて、喰種の時も知っているということ、喰

種になりなてっぽいから多分、前は人だったのだろうという推測をしているということか、どちらかだろう。多分前者の気がする。口ぶりに、人の時の私を知っている感じだったから。どちらにせよ、必然的に私が女の人を襲おうとしてから、朝目覚めるまでの10時間ぐらいの間に会ったことになる。しかもその間に名前や住所、職業なども含めてたくさんの私に対する情報を得たのは確かだ。しかも、そこまですべて、実は、私なんかには色々教えることは、不本意なことなのでは無いか？ということだ。時たま現れる表情がそうだ。でも、それだと誰かに指図を受けているようでおかしい。あの人人が人に指図されて黙っているわけが無い。力があるものが支配できると思っっているあの人のだから。しかも、一回、なぜ私のことを知っているのか、あなたは私に訪ねた日の一日前の21時から私を訪ねた日の7時までの間にどこで何をしていたか、あなたは、なぜ私に色々教えるのですか、あなたの目的は？と聞いても

「さあ？」

の一言。つまり、さっぱりわからない。

まあ、リゼさんは、男の子と本屋デートを楽しんだ後、食事も楽しんで、今日会う予定だし、その時に聞けばいいと思った。

しまった、またコーヒーが冷えてしまった。冷めたコーヒーを捨てた。この時間にコーヒーを飲むのは諦めた。

4. 私のルーツとは？

取り敢えず、23時だ。約束の時間より30分経過している。なぜだろう。いつも時間の10分前には必ずいるリゼさんが、遅刻？あり得ない。何か裏があるのでは無いと思い、周りを見渡すが、特に何も無い。ただ、テレビが目に入った。話によると、この地区の「工事現場で男と女が、鉄骨に潰されている。」というニュースらしい。横に速報とあることから、一、二時間ぐらい前に起きた新しいことだとわかる。そしてその工事現場近くに本屋さんがある。そして、「デートでは、最後、工事現場に追い込んで食べようかな。」という言葉を出し出す。

とても胸騒ぎがする。もしやと思うが、リゼさんが被害者なのだろうか？いや、そんなわけが無い。なにせ、あのリゼさんだ。そんなことあるわけが無い。

まあ、冗談はほどほどにして、電話やメールを入れても連絡がこないで帰った。

が、その帰り道、少し気になったので、私が入った時の最後の記憶、女の人を襲った時の場所へ行ってみた。人気がない暗い路地だ。今の時刻は25時。つまり、一日が過ぎてしまった。ただ、ここに来れば、私のことがわかるはず、となんとなくふと思つて来てしまった。いや、いくらなんでも半年が過ぎていて。今更行つても意味が無い。ただ、僕の勘が言っているのだ。ここに今行けば何かあると。そして、ふと調べているうちに顔を上げると、周りがとても眩しかった。いや、光があるから眩しいのではない。なんとというか、周りが全て真っ白く、まるで宙に浮いているかのような感覚がした。そこから、突然、

「ダッ、ダッ、ダダダダッダーンダーンダッ、ダッ、ダダダダダッダーンダーン、ダーンダーンダダダーンダダダーンダーン。」

スターウォーズの帝国のマーチ、つまり、ダースベイダーのテーマ

曲がながれる。そして、ふと足元を見ると、黒い橋のようなものができている。ふとその奥を見ると、黒い男が歩いてくる。その男は、黒いシルクハットをかぶって、外側が黒く、中側が赤いマントを身につけ、顔の部分に、目と口と鼻が空いていて、その空き方が、ジグザグしている、おじさんのシワのように見える黒いマスクをつけている。その男は黙って私の方に近づいている。そして、私の目の前で止まった。と同時に、帝国のマーチも音が途切れた。

「久しぶり、賢剣凱くん。とは言っても、私のことなんぞ覚えていないだろうが。最近良く使っている名前という死神かな？」

「はい。そうです。しかし、その三文かな？でわかることが1つ。まず、私のフルネームを知っているということは、ある程度私のことを知っているか、調べ上げたということでしょう。まあ、今の口ぶりからしてどこかで会ったというのが正しそうだが。ついでに、この環境を創り出せるということから、喰種だとか、それ以上の力を持っているものだとわかる。超常現象の類かな？私はそんなもの信じない予定だったのにな。ただ、なぜ、ダースベイダー流すかな？」

「そんな口叩いて良いのかな？私をすごい力があると今認めたのにな？」

「負けを認めた時点で負けだからね。」

「君とはそもそも格が違うのだから、勝ちとか負けとかないでしょ？」

「どういう意味で？私の方が強いということですか？」

「まさか。わたしが最強ということだよ。」

「ふーん、ではその妙な解釈を変えてみせましょう。」

右手から大鎌、左からチェーンソーを出す。

「仕方ない、予定とは違うが取り敢えず現実を見せてからだな。」

と言いながら、相手は、何も構えなかった。

「ふーん、随分と余裕ではないですか。」

「そつちからどーぞ。」

「先手必勝っ！」

「死亡フラグ乙。」

大鎌を振り上げ、頭へ振り下ろす。

しかし、ある程度の高さから動かない。

見ると、大鎌の刃の部分を、左の人差し指と中指で挟み、止めてい
るのではないか。無論、今と力を加えている。

「はあ？なぜ受け止められたし？」

「さあね。」

「面白い！だが、わたしの勝ちですね。」

大鎌の刃の部分が伸びて、顔に当たりそうになる。

しかし、顔を左に傾け、避ける。と同時に左手を捻った。すると、大
鎌の刃が折れた。

「嘘、俺の大鎌が折れた……。」

「もう終わりかい？君の強がりも弱々しいものだね。」

「五月蠅い、五月蠅い、五月蠅い！」

「ツンデレかな？」

そんなウザい相手の言葉は無視し、右手の折れた大鎌を体の中に戻
し、もう一回大鎌を出す。

そして、もう一回大鎌を振り下ろす。

もちろん相手は、左手の人差し指と中指で挟み、止めた。

大鎌の刃の部分が伸びて、顔に当たりそうになると同時に、左手の
チェーンソーを右から左に、つまり横に切る。

そうしたら、相手側は頭が避けるのではなく、上を向き、首の向き
を変え、刃に歯で噛み付かれた。おいしく大鎌の部分はただかれま
した。

そして、右手の人差し指と中指で、チェーンソーの回転している刃
を止めた。そして、その武器を支点として、上に蹴り上げ、回転する
ようにして、顔をキックした。喰種でも出ないような力だ。

とりあえず間合いを取る為、後ろに下がる。

「チェーンソーの刃を無理やり止めるとかあなた何者ですか？」

「それはあとのお楽しみで。散々俺に攻撃してきたのだから、わたし
も攻撃するよ。」

と言って、黒いマントの中から出したのは、トランプセット。

トランプセットの中からトランプを出し、シャッフルした。

そしてそのカードを左手に持ち、上のカードから右手に持って行き、カードを回転させて投げる。

避けようとするが、カードの速さがあまりにも早すぎて、見えず、そして避けられない。右に避けたらカードに当たり、ジャンプをしたらカードに当たり、しゃがんでもカードに当たる。しかもクインケではないっぽいのに痛い。血も出る。

「おい、なんで僕の動く先にカードが飛んでくる？君は、人の動きを予測できるのか？」

「はい、もちろん。」

「なぜ私にクインケではないもので攻撃できる？」

「さあね。では、君たちの方法でトドメを刺そうか。」

そうしたら、腰の辺りからから、糸を撚り、さらにその糸を撚り、さらにその糸を撚り……を繰り返したかのような形の赫子（鱗赫かな？）を7つか8つ出した。

そして、その全ての赫子を私に向けてきた。

もちろん、私は右手に鎌、左手にナツクルを出す。

そうしているうちに、赫子が近づいてくる。鎌で一気に2本、ナツクルで1つ切り落とした、が、その先の糸がほどけ、その糸が伸び、もう一度それが撚られたようになる。

そして、攻撃されなかった赫子で、私の体を貫いた。

さらに、2本の赫子は、ほどけて、その貫いた傷口をに入り込み、少しずつ食べていつている。

「ヴグアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「降参したら許してあげよう。」

「ツグ、私の負けです、喧嘩を売って申し訳ありませんでした。」

「はい、よろしい。」

と言つて相手が指を鳴らした。すると、次の瞬間、私の傷が治っている。

「凄い……。」

「だろ？私は強いからね。」

「どうしてこんなに強いのですか？」

「才能×努力だよ。まあ、なにせ何年も修行をしてきたからね。とてももない時間を…」

「はあ。ところであなたは、私がなぜ喰種になったのか知っていますか？」

「もちろん。なにせ、あなたを喰種にしたのは私だよ。」

「えっ—！」

嘘だろ……この戦闘能力が高く、しかも私をボコした相手が、私を喰種にした人（？）だなんて。

「おーい、俺は、れっきとした人間だぞ。」

「取り敢えず、なんなんですかあなた？」

「そうです、私が、変なおじさんです、ではなく、訳あって、世界を面白くする為に旅している。決して頭がおかしい訳ではない。君は、性格が面白い、医者という職業、年齢や趣味や技能、人肉食いの趣向を持っている、そして、強い力を持ったら面白くなりそうな悪の心、それらのことから、君にこの世界の裏の力、すなわち喰種にしたら、どうなるかなー？という実験だったのだよ。しかも、君に与えた力は、とても強い力だ。赫包は、13個も持っているし、自分の赫子から従者をたくさん作ることができるし、赫子を分裂させてたくさんにすることもできるし、今、20%ぐらい覚醒している半々赫者状態だから、君の言う喰種砂糖をたくさん摂取すると、完全に赫者になりやすい、まあ、つまりは君は赫者になりやすい体質に設定しているし、ただの身体能力も喰種の中でトップクラスだし、君の言う人砂糖をたくさん飲むと、体の疲れるのが軽減されたり、従者に与えると、動きが活発になったり、喰種砂糖を飲むと、赫子が安定し、とても使いやすくなったり、従者に与えると、形が確定していき、従者のコアとなることとか、それぞれの武器には、特殊能力、例えばブーメランを出して投げると、基本的に敵の頸動脈の方についていくなどがあるとか、とにかくサービスをたくさんした。」

「嘘、私にそんな隠された能力があったのか……。」

「ただ、通常の喰種とはいろいろ身体のシステムが違うから注意してね。例えば、赫包が普通の人よりも多いから、戦い終わったあととて

も疲れてお腹が空いたりね。というか、そもそも喰種は、こんなに能力持ってないからね。」

「なぜにそんなチート機能あるのですか？」

「さあね。」

「なんじゃそりゃ。」

「まあ、取り敢えずどんどんこの世界を面白くする為にこの強い力で暴れてくれ。」

「はあ、考えておきます。ちなみに、なぜ、私の記憶が、約10時間程消えているのですか？」

「それは簡単なことだよ、ワトスン君。記憶を消して、半年間どのような行動をするか様子を見るためだよ。どこまで、私に近づけるのかなー？って。」

「ほう、なるほど、つまり、私は何も進展してなかったので負け組と。」

「んな訳ないでしょ？もしそうだったら、記憶とか能力とか消して別の実験体を探すよ。まあ、私を探せなかったけど、赫子を使いこなせだし、ある程度実績を上げていたから合格かな？と。」

「有難うございます。」

「ちなみに、消した分の記憶の説明をしておこう。まず、あなたは包丁を持って、女の人に声をかけ、刺した。が、その人の皮膚が硬いかなんだか知らないが、包丁が折れてしまった。そして、その女の人が、後ろを向いた。その相手こそ、『神代利世』さんだった。逆にあなたがやられそうになったのでこの私が行こうとすると、時すでに遅し、大喰いの赫子がすでに腹を刺していたところだったが、トドメはまだ刺されていない。なのでトドメを刺されないようにすぐ向かった。そして、リゼさんにrc細胞を無効化する気体が入っている風船を投げつける。そして無効化したところで、リゼさんと交渉したのだよ。まず、俺が強いということを見せさせて説明した。しかも一瞬で君の体も治してね。それで私が凄いということに納得し、私の言うことを聞いてくれたよ。すなわちお前の教育をしてという要求ね。そうしたら、喜んでやってくれるとき。まあ、代わりに面白い能力を

授けたけどね。」

「その能力とは?」

「教えなくい。けれども、それでとても強くなるはずだよ。」

「なるほど(?)ね。それで彼女は面倒臭く、つまらない私の教育なんてしてくれたわけですね。」

「そういうこと。」

そして、本題その2に入る。

「ちなみに、できれば教えて欲しいのですが、リゼさんは、どこにいますか?」

「さあね?知ってても教えなくい。」

そして真面目な口調で、

「自分で探し当てなさい。わかったか?」

いきなり口調が変わったので思わず、

「はい、わかりました。」

と言ってしまった。

「よろしい。では、この世界を面白くするために頑張りました。つまり、君は、君がやるべきことをコツコツとやれば面白くなる。そして、戦うべき相手を倒したら、リゼさんの場所を教えよう。」

相手は、こういううちに、もう歩き出していました。急にまた足を止めて、私の方にふりかえると、

「おお、幸い、今思いましたが、リゼさんのことについて、あんていくにいくといいことがあるかもしれない。会員証をクーポンごとおまにやるから、早速行って使うがいい。今頃はちょうど、あんていくにリゼさんに関係ある人が来始めているだろう。そこで用心棒として雇ってもらうのもいいかもしれない。」

と、さもゆかいそうにつけくわえました。

(鉄冠子かよ、こいつ。)と思いつながら、大事なことを聞く。

「あなたは誰ですか?結局、世界を面白くしようとする理由はなんですか?」

「さあね。ただ、名前は教えてあげよう。『黒神 翔馬（くろがみしようま）』だ。まあ、巷ではKと名乗っているが。」

「K、あなたはいったい何者なんですか……」

すでに周りは明るかった。しかし、白ではなく、もう普通の景色。とりあえず、様々なことがわかった。さて、どう動こうか……。

何も考えずに家に着いてしまった。なぜかすごい疲れた。（いや、そりや疲れるか。）

とりあえず寝よう。

5. 夢の中の戦い

私は、今工事現場の中にいる。

体が、勝手に動く。人影がいる方にだんだん進んでいか。前の方に障害物があるはずなのに、体がすり抜けていく。なぜだろう？と考えたらすぐ答えは見つかった。

「これは夢である。」ということだ。

つまり、今明晰夢を見ていることになる。

これは来たぞ、あんなことがこんなことを夢の中でいくらでもできる。(もちろんRタグがつくようなことだ。とは言っても、エロではなく、グロの方ね。私はエロは興味ない。グロの方が大好きだ。人殺しまくって美味しいお肉を食べまくるぞ。)

と思つて、早速筋肉のついてる男が走ってくるように念じた。すると、体が、勝手に動き出した。さつきと同じように。

(あれれ〜おつかしいな〜)と思ひながら体が動くままに動かしていると、人影が2つあることが分かった。1つは、華奢な体をしている、つまりとても弱そうな本好きそうな大学生の男の子、もう1つは、メガネをかけた美人、そして腰の辺りから鱗赫を出している。

そう、リゼさんだ。

どういうことだろうか？もしかしたらこれは、今日の胸騒ぎの答えなのではないか？夢で何があったのかわかるようになっていいるのではないのか？と思ひながらじつと見ている。

リゼさんが、赫子を男の子の腹に突き刺す。

そしてとどめの一発を刺そうとした瞬間、上から鉄骨が降ってきた。なぜかと思ひ、上を見たら、もう1つ人影が見えた。ピエロの仮面をかぶった人だ。多分あいつが、鉄塔を落としたのだろう。そしてピエロの仮面、あれはおそらく、鳥が言っていた「ピエロ」の一員のものだ。つまり、ピエロによって殺されたんだと考えられる。

そのことを理解し、怒り狂い、ジャンプでピエロの所まで行こうとしたところで、周りが白くなった。

？

「如何だったかな？私が製作した、ノンフィクションのドキュメンタリー映画は。」

私はふと気づくと例の白い空間の中にいた。

「……。」

「どうしたのかね、賢剣くん。」

「……。」

「だから、どうしたと……。」

「なぜ、助けてやらなかったのですか！」

「……はい？」

「だから、なぜ助けてやらなかったのですかと聞いています！こんな作れるということは見えていたということですよ?!」

私は怒りをぶつけた。

「あそこまで明確に分かるということなんだからね。少なくともあんなことがあるとは把握していたのでしょう！なのに、なぜ、助けられなかったんですか！」

そうしたら、Kは言った。

「なぜ私が助けなくてはならない？」

「?!」

「なぜ、助ける必要がある？あの人が倒れることによって、世界が動き出すというのに。」

「なるほど……。」

私は、剣を出していた。

「なぜ、貴方は、そんな考え方ができるのですか？なぜ貴方はそんな冷静で居られるのですか？仮にも私の教育をリゼさんに命じたのは貴方のはずですよ。それなのになぜ……。」

剣を振り下ろす。が、またも、人差し指と中指で挟まれ、動かなくなつた。

「残念ながら、君も同じ人種だと思うが。自分が良ければそれで良い。自分が楽しければそれで良い。そんな人だと思っただけれども。」

「……。」

「君は、ただ美味しいという理由でまだ君が人であった時、人を殺して

いたではないか。喰種のように生きるのに必要ではないというのに。」

「……。」

「そもそも君の生き方だってそうではないか。人の前ではいい子にして、みんなから利益を得る。裏ではチンピラから金を巻き上げる。とても利己的ではないか。」

「……。」

「しかもとても合理的な行動をし、さらには人の感情を勘定に入れない人間ではないか。」

「……。」

「それをなんとかわかるか？物事を客観視し、最適解を行く人、即ち君は、『サイコパス』なのだよ。私と同じで。」

「……。」

私は、目から涙が溢れてきた。確かに、Kの言う通りだ。私は、「サイコパス」だ。自分は、生きるためでないのに人を殺し、そして、楽しんでる。確かに私はとんでもないやつだ。

だが、Kはまた口を開いた。

「しかし、サイコパスの意味は『精神異常者』という意味ではない。『物事を冷静に見ることができる者』という意味だ。つまり、悪い意味ではない。」

「……。」

「別に正しいことをしろとは言わない。私も君たちの尺度では正しい事はしていない。まあ、この世界では私が正義だが。ただ、『自分の正義』は貫け。それだけのことだ。関係ない話だけどね。」

「……。」

またもや涙がこぼれ始めた。

「んで、怒ってほしくないのもつと言うと、リゼさんは、死んだのではない。詳しいことは言わんが、君が会いに行くこともできる。が、私は、この世界を面白くするために動いている者、私情で動く訳にはいかないの、後で提示する条件を満たせば色々教えてやる。」

「……わかりました。」

会話がひと段落ついて息を継ぐ。

？

そして、Kがニヤリと笑った。

「ところで、正義を貫くためには、私のように力が必要だと思うが、どうであろう？」

『私のような』って……。とても自信がありますね。まあ、その通りだと思いますが。」

「実を言うと、君は今の状態でも強いが、前も言った通り、もっと強くなるように設定されている。だがしかし、それだとはつまらないので、君の体にはリミッターをかけてある。ある程度強くなったら解放しようと考えている。」

「はあ。」

「だから早速解除しようと思うが、どうする？」

「勿論、やらせていただきます。」

「OK。じゃあとりあえず……。」

Kは指を鳴らした。

この空間に、「120」という文字がたくさん現れた。そして、顔がのっぺらぼうの全身白タイツでも履いたようなやつ、ただし、尻尾らしき物が生えている。

「喰種ですか……。それも、尾赫。」

「ご明察。んで、この空間にある『120』という字が『0』になるまで、つまり120秒間こいつから逃げ切れればいいよ。」

さつき現れた喰種のようなものを指して言った。

「なんか弱そうだけどいいですか。なんなら倒してしまいうまでですが。」

「いいよ。できるものならね。」

早速、手から鎌を出そうとした。が、出ない。

「あ、言うの忘れたけど、君のブラッドフラワーと手から出るやつ、そうだ、後で名前つけておいてね。は、使えなくしてあるから。それでは、頑張って逝ってね〜」

「ちよつと?!逝くの字違うでしょ?ねっ?おーい。」

kの姿が消えた。なんと言うことだろう。

目の前にはいじらしくも、のつぺらぼうの喰種が尻尾(尾赫)を振って、こちらに歩いてきた。

距離およそ5メートル。見た感じ、遊びたがっている(命をかけた)ようだ。多分赫子は三本ある。少なくとも三本あるように見える。

次に自分のステータス。右手からも左手からも武器を出そうとしたが、何も出でこない。ブラッドフラワーも同様だ。つまり、肉弾戦になると言うことだが、私は鍛えているといえれば鍛えているが、それでも普通の人(・)より強いぐらい。喰種の生身にも勝てるかもしれないが、さすがに赫子を出された状態で勝てるとは到底思えない。

導き出される結論は……

「につげるんだよ〜120秒間逃げ切つてやろうじゃないか。」

と、のつぺらぼうの喰種がいる方と反対側にはしりだした。この時周りにある数字は、「110」。

が、走り出した途端に異変に気付いた。

「体が重い……。」

体が10倍ぐらい重い。まるで二日酔いが一気にきた様な重さ。なぜだろう……。

「ちなみに言うの忘れていたけど、この空間は、君の力を10分の1する代わりに、相手の力を2倍するものだからね。」

「は？ふざけるなよ！それ実質、相手の力が20倍にされていると言うことだろ？しかも俺の赫子使えない状態だろ？どうやって勝つんだよ？」

「それでは、頑張つて逝つてねー」

「おい、それ逝くの字違うだろ、おーい。」

声が消えた。走りながら聞いていたが、もう体力が切れそうだがしかし、もうのつぺらぼうの喰種との距離は縮まっていた。そして、今、のつぺらぼうの喰種が赫子を私の方にだしてきた。

今、空間の数字を見ると、「80」。その距離3メートルほどしか離れていない。

「ツクー！」

と避けるが、避け切れない。と言うか3メートルは近い。肩に傷を負った。

しかも、さつき、Kの言う「ノンフィクション映画」に出てきた男の子にも傷があった（多分噛み傷だろう）。もう死亡フラグでは無いですかーやだー。

あとどれぐらい逃げなければいけないのかと、周りの空間を見ると、「60」。

「1分間逃げなくてはならないのかよー！」

取り敢えず、のっぺらぼうと距離を取りたいので、足に力を入れて、地を蹴る。

大体10メートルくらい飛んで着地しようとし、地に足を着こうとしたら力の入れ具合を間違ひ、後ろに盛大にこけた。疲れが溜まると全くろくでもない……。

そう思いながら、前を向くと、前にのっぺらぼうが見える。わざわざ回り込んで正面からトドメを刺してくれるようだ。

「くそっ、俺は死にたくないッ。まだやりたいことが山ほどあり、やるべきことも山ほどあると言うのに！俺はまだ死ねないッ！」

自分の目の前にのっぺらぼうの赫子が迫りながらそう思った。空間には、「45」。

その時、肩の方に、異変を感じた。何かが出るような感じがしたのだ。

そして目の前を見ると、のっぺらぼうが、肩の方に銀色の棒のようなものが刺さっている。それはどこから出ているのか見ていると、自分の肩甲骨のあたりから出ているようだ。つまり……。

「赫子が出てきたということかな？」

空間を見ると「40」。

「では、武器も手に入れたことだし、反撃に入りますか。」

まず、赫子を白い喰種から抜く。そして赫子を観察する。

左肩甲骨に一本生えている赫子は多分甲赫。甲赫は、見た目は銀色で、細い針金のようなものを纏め、さらにその纏めたものを纏め……を繰り返したものだ。似ているものは、大英博物館にある、「スニティ

シヤムの首輪（googleの画像検索をしよう）のような感じである。まあ、先は全然違うが。

んで、この赫子は重い。素早い攻撃はできそうにないが、代わりに一撃が強い攻撃ができるだろう。そしてこの赫子は硬そうだ。しかも、この細かい針金のようなものには、「弓のこ」のように一本一本に刃が付いている。なので叩きつけるのにも、刺すのにも、切るのにも使えるっぽい。ただ、赫子を曲げるのに他の人の赫子より時間がかかる感じだ。

この分析に10秒も費やした（色々動かしただからね。）ので、周りを見ると「30」という数字が浮かんでいる。

「余裕で時間が余るな。では、さっさと殺つてやろうか。」

白い喰種は、尾赫を向けてきた。

「無駄無駄無駄無駄無駄」

なんの変哲も無い相手の赫子につきさつき生えた甲赫をぶつける。相性については特になかったはずだが、すぐに相手の赫子が崩れた。

次に自分の赫子を相手の横っ腹に叩きつける。

相手は避けようとするが避けられず左に吹っ飛ぶ。

引っ込めると横っ腹に跡ができていて、少し切れている。

やはりこの赫子、強い。というわけでとどめを刺す為に白い喰種に赫子を突き刺してみても、力を加える。そうすると、赫子が回る感触がする。

「ドリルになるのか。これは結構使える。」

思いつきり力を加えると「ウイイイイイーンツ」という感じの音がした。抜くと大穴が開いていた。ぼたり、とのっぺらぼうの白い喰種が倒れた。

周りの空間は、「9」という数字で止まっている。

ふと、後ろを振り向くと、

「おめでどう。死ぬかと思ったけど死ななかつたね。死ななくても、逃げ切ることと勝つと思っていたのに。君は期待以上のことをした。素晴らしいッ！しかも甲赫を目覚めさせたとなるとなお、素晴らしい

「いッー！」

「やっぱり殺すつもりだったじゃないですか。」

「いや、最悪のっぺらぼうが殺しそうになったらその瞬間に消せばいいしね。べつにいいじゃないか。生きているんだからさ。」

「まあ、そうですね。そういえば、リミッター解除の件、早くして下さい。」

「とはいってももう12分の1してあるけどね。」

「☒」

「その甲赫だよ甲赫。あ、名前付けといてね。んで、それは賞品だったの。つまり、赫子の解放が賞品。で、君の意志の強さで解放されたということだよ。素晴らしいッー！」

「じゃあ、その解放とやらをして下さいよ。先輩。」

「うん、いいよ。ただ、おれは先輩じゃないよ？いや、一応君よりずっと長く生きてるけどさ。」

「ちよつと待って下さい、あなた20代くらいに見えますが、私よりずっと長く生きているとはどういうっ？」

「まあ、俺に年を聞くことは基本的にご法度なので悪しからず。ただ、君が思っているよりはるかに生きていますよ。」

「そうか、宇宙人だったら考えがつく。この人10000年とか生きてるんだ。そうでしょ？」

「さあっ？」

とkはとてもニヤニヤした感じで笑っている。

「ところで、解放の件については？」

「わかったわかった。やるから。ちよつと動かないでね。痛みは一瞬ですよ。」

「何？俺変形するの？」

「ほんと君は機嫌がいいときはこうやって面白いやつなのに……。勿体無い……。」

「うるさい！黙ってる！」

「はいはい、動かない動かない。」

仕方なく大人しくしていると、まず右の肩甲骨の下の方、その次上

がって、両肩、その次下がって、腰のあたりを四箇所、そして尾骶骨のあたりを触られた。

「あの……。今の痴漢ですか？まさか男色の趣味が！」

「ほんと君は落差が激しいよ。俺は女が大好きだから、男はいいや。あと、赫包のある位置触っただけってわかってるよね？絶対？」

「はい、そうですけど？」

「だめだこりや。取り敢えず、羽赫が二本、甲赫が二本、鱗赫が四本、尾赫が一本、で、ブラッドフラワーが一本で、計十三本也。」

「十三とは不吉ですなあ。とかではなく、なぜ十三本も私は持っているのですか？異常ですよね？」

「うん、異常だよ。」

「なぜこうなったのですか？」

「君の才能だよ。赫子というのは、量とかパワーは才能、形は想像力で作る。つまり、君は才能があったということだよ。」

「はあ。」

「ま、とりあえず君は力を得た。この力はとてつもなく強い力だ。この力を存分に発揮しなはれ。」

「はい。」

「あと、もつと強くなりたかったら、CCGのレートでS+以上にしなさい。そうしたらまた力を解放しますから。」

「はい。ってえー！S+レートってあのS+？ただのSではなく？」

「モチのロンだよ。」

「へえー大変な課題ですねこれ。」

「そういえば大事なことを言うのを忘れてた。」

「なんですか？」

「それでは頑張っっていつてねー」

「9」という文字がぼやけている。いや、この世界すべて、建物からkまで水の中に入れたインクのように薄くなり、そして……？

「朝か。」

「ここは夢オチで終わるのが筋だろうが、残念ながら、腰に力を入れ

ると、鱗赫が出てきた。引っ込めてベットにまたボタンと横たわる。起きてから思っていたことだが、とても肩が重い。ぐったりとしてしまう。なので二度寝した。仮病しよう。なにせ本当に体が動かないのだから。そんな大事な授業はないはずだ。ぐっすりと寝させてもらおう。ぐっすりと寝させてもらおう。そう思いながら寝た。

6. 仕事を頼みに…………。

講義を頑張って1週間の仕事をやっと終わった。そして、日曜日の昼、とあるマンションに来た。結構大荷物なのは理由がある。(後述する)そして、インターフォンをおす。

「ピンポーン」

「…………。」

「おい、私だ私。開けてくれ。」

「…………。」

インターフォンは沈黙したままだ。

「私だ私。いいもの持ってきたよ。」

ここで万札を二枚だし、擦り合わせる。鞆の中で。

「いらっしやい♪」

「変わり身速いな。」

ガチャつと音がして、ドアが開いたら、そこにはとても可愛らしい女の人がいた。という描写ができないくらい速くドアが開けられた。

「とうか、『俺だ俺』ってどこの詐欺だよ。」

「あはははは。」

「とりあえず中に入って。」

「はい。」

お茶を出される。

「用件は何?」

「まず、預かりものから。まず、蠍王から。」

大きな鞆から缶詰を出す。

「自分で作ったそうだ。君の好きな脳味噌らしいよ。」

「へえ。今度は缶詰を作ってくれるのか。」

「次に烏から。」

たくさんの書類が入っているとされる袋を取り出しながら聞く。

「ちなみにこれは何？」

「私が頼んでおいたやつだよ。パソコンとかでは調べられないのを調べてもらっているんだよ。主に口コミ。」

中身を開けて見ながら彼女は言った。

「うん、よくできているな。んじや、これ渡しておいて」

私に福沢諭吉が50人と一枚の紙が渡された。

「絶対お前が使うなよ。後、領収書ね。」

「勿論。」

「んで、後、皇帝から。」

「よっしゃい！ワイン」

「よくわかったな。というかいつもそうだからか。」

と言いながら鞆からワインを出す。

「頼んでおいたあの漫画に出ていたワインだ！」

「よかったな、というかさっきの機嫌の悪さはどこへ行ったのか？」

「それはデイトレードでやらかしたからだよ。まったく、なぜ最近株価の値の変わり具合が激しいのかな？」

「わかってはいるだろう、喰種が最近よく暴れているからだよ。わかっているだろう。」

「まあね。」

「まあ、ならば生活費の足しに使ってくれ。」

大きな鞆から一番でかいもの、ジュラルミンケースを取り出す。

「300万ありや大丈夫だよね。」

「通帳やるからまた入れてきてくれ。」

机の引き出しから銀行の通帳を取り出し、そして、ポイツと私に投げた。

「ずっと思っていたのだが、私に預けていいのか？」

「残高覚えてるし、それに…」

「なんだい？」

「あなたを信用しているから。」

「ありがと、ありがと。とても感謝しているよ。(棒)」

「何この雰囲気の違い、私、恋愛ムードっぽくしてたのに、あなたは冷

たい。どういうことよ。(棒)

「だって今の言葉からわかる通り、演技でしょ」

「まあね。」

「んで、本題は難題？」

「とうとう？」

「あなたが来るときは仕事を持ってくるでしょ。今まで2回で、『各区の喰種の勢力と各区のCCGの勢力』という内容の書類と、『喰種の有力者リスト』という内容の書類を作らせたでしょ？あれ、作るのとても大変なんだからね。ネットとかだけでなくその土地の様子とか噂とか調べる必要があるから、人をわざわざ雇わなくてはいけないんだよ。」

「はいはい、わかっていますよ。」

「まあ、わかっていると思うから金とか持ってくるんだと思うけどね。思うことにはしますよ。」

「はい。」

「んで、仕事は？」

「私についての情報を至急に集めて欲しい。1週……」

「1日で仕上げると。わかったよ。今回は簡単だね。何せ一人の情報でいいのだから。」

「う、うん。まあ、ただ、とても詳しく、CCGの資料から私の噂をしている一般人までの情報をわかりやすくまとめて紙にまとめてくれ。そして、別紙に一枚でわかる私の情報的なやつを作ってくれ。」

「他の人に見せるのかい？どこかの組織にでも所属するための履歴書にでもするつもりか？」

「半分ぐらい正解。紙っぺら一枚のやつはそう。何枚でもいいと言ったやつは自分で読む用だ。んで、紙っぺら一枚は、組織に所属するのではなく、単に私を知ってもらうためのものだ。」

「ふーん。取り敢えず、きつそうな仕事だから、やっぱ3日くれない？100万にしてもいいや。」

「いや、とっておいてくれ。別にお金はお前へのプレゼントだし、仕事はついでに頼んでいるだけだ。」

「ふーん。」

「わかった。3日後の23時、仕事があるから、いや、定休日だったから、朝の10時ぐらいにまた来るよ。それまでまでに通帳に入れておくよ。」

「はい。ありがとう。」

「いや、じゃあね。」

「あの……。」

「なんだい？」

「……プレゼントはお金じゃなくて、物がいいな。安くてもいいから。自分の生活費と仕事で使う分ぐらいは余裕で稼いでいるから。あなたのプレゼントが見てみたい。いい、無粋すぎるんだよ。」

「わかった。考えておく」

取り敢えず家に着いた。そして、彼女のことを再び思い浮かべる。

彼女は、「侵食者（ハッカー）」と呼ばれている。なぜならば、赫子で死体の動きをプログラムできるからである。つまり、赫子を死体の脳に差し込み、電気を流して、簡単な動きをコントロールするということだ。もちろん、人も喰種もだ。頭の中のことを話すとプログラムすれば、真実を喋らせることができる。ただ、喰種の赫子は操れない。

そしてその子は、「引きこもり」である。とは言っても、年は多分20歳代ぐらいだと思うので、自立はしている。（ちなみに本当の年齢を調べようとした人は、ネット上で個人情報がアップされるらしい。例えば、w○k○p○e○d○i○aに住所からその人の日記の中身まで事細かく載せられるらしい。そしてそれはちょうど1週間経つまでどうやっても削除できないとか。）実際、デートレードで、株から先物まで手を出していて、相当儲かっているらしい。ただ、部屋からほとんど出ない（とは言っても、ゴミ捨てはするし、とても安全な(?)引きこもりだと言える)ので、クレジットで生きている人間。ちなみにマンションから出ることは、月一ぐらいはするらしい。

見た目はとても可愛く、可愛い。とにかく可愛い。可愛いという文

字を使うなというのならば、美しい。部屋を出ないからだろうが、白い、まるでミルクのような肌。髪は今日は結んでいなかった。サラサラとした黒い髪が肩を包み込んでいた。顔は、形容しがたいほど可愛い。綺麗というより可愛い。スタイルもいい。身長は私より10cmほど小さいぐらいだから、165cmぐらいか、体型からして55kgはあるかと。(いかん、私に変態のように思えてしまう。)

まあ、そんな感じの子である。

この子の特技は、パソコンとかで、インターネットはお手の物。ブログラミング、ハッキングとかもできる。(できるとかいうレベルじゃない。普通にCCGとかの機密情報とか持ってきて、それがばれないぐらいのすごさ。)

ちなみに彼女の本名は、「青山 凜」という。

彼女と出会った経緯は次の通りである。

7. 「Antares」の人たちとの出会い

侵食者と出会ったのは4ヶ月ぐらい前、つまり喰種になってから1ヶ月半経とうとしている時だ。まだ20時くらいだが、うろついていた。路地の行き止まりに行き着くと、赤い眼をした二人組の男が、うずくまっている人を赫子で刺そうとしているのが眼に入った。

「さて、美味しそうだし喰べるとするか。」

「そうだな、秘密は吐かないし。」

「まあ、罪がない喰種を強い喰種が食べても仕方がないってものよ。」

「弱肉強食だしね。」

「俺たち最強だからね。反撃できるものならやってみろよ。小娘。」

うずくまっている女の人が（話からして喰種が）怯えている。

私は、その一連の事を見ていてムカついた。しかし、弱い喰種をいじめているからでは決してない。

ウザいからである。自分たちは二人がかりで女らしき喰種を殺ろうとしている癖に最強の名を騙るのには力チンときた。

「おい、てめーなにみてんだゴラあ、さっさと消え失せろ。」

男の一人が、私に気がつき、振り向いていた。そいつは今日道でぶつかってきて、からんできて、態度が悪く、うざかったやつだ。

相手は気づいていないようだが、私がこの後やる行動は決まった。俺に命令するな。命令できるのは立場が対等のものか上のものしかできない。しかも俺の服を唾でを汚しやがって、迷惑かけ放題だな。」

「はっ?なに言ってる……」

おれは無言の腹パンを放つ。

「んぐはっ。調子乗ってんじゃねーよ、くそが。」

相手は腰の辺りから3本ほど赫子を出した。結構太い。が、

「五月蠅いよ。」

右手から日本刀を出す。

「ごっちのセリフだ、ぶっ殺す!」

「死亡フラグ乙。ジョジョを読め、ジョジョを。」

相手の赫子が伸びてきたが、私は手を少しだけしか動かさなかつ

た。

すると、赫子が粉となった。なにを言っているのかわからないと思うが、そのまんまの意味だ。赫子が一瞬にして粉々となり、細かくなって消えた。

「なに?!」

「遊びは終わりだ。」

日本刀を少し振った。

体が消えた。

首から上だけが残った。なにを言っているのかわからないと思うが、そのまんまの意味だ。いわゆるダイアーさん状態だ。

『ぶっ殺す』と言ってから行動するのではダメだ。『ブツ殺してやる』ってセリフは……行動が終わってから言うもんだぜ。つまり、『ブツ殺す』と心の中で思ったならッ!その時スデに行動は終わっているんだッ!」

「ひっ!」

「次、お前。最強とか言っていたな。」

「この男、死神か、悪魔だ……。」

と言った瞬間、体が8等分された。つまり、縦、横、高さをそれぞれ2等分されたということだ。

そして女の人。

「念のため言っておくが、お前のために助けたわけではない。だが、二言ほど言わせてもらう。こんな時間に出歩かないほうがいいぞ。そして、余計な御世話だと思うがどうしても夜歩く場合は、一人で歩かないほうが身のためだ。」

その女の人は、私の方をじっと見つめた。そして「ありがとう」と言った。

その日の22時15分前ぐらいに、「Antares」に入った。

そもそも、Antaresを知ったのは、その日の17時くらいのことだ。リゼさんが「この世界で生きていく場合は、情報が必要にな

る。だから、情報屋と仲良くするのもいいと思う。」と言って紹介してくれたのは鳥さんだ。

「詳しい話は私お気に入り入りのBARでどう?」

と鳥に言われて行ったのが「Antares」だ。

まあ、つまりだ。

「そこでは、私が奢るわよ。」

「ありがとうございます。」

「その代わり、バシバシあなたの情報を教えてもらうからね。」

「じゃあ、私は帰るね。じゃあね。」

「ちよつとりゼさん……」

ということと、22時に「Antares」集合ということになった。というか、連れてつてくれたって良いでしょうが。まあ、準備することがあるとか言っていたので仕方ありませんが。

そして、質問攻めにあつた。リゼさんが教えたのだろうが、私が突然喰種になったことを知っていた。(というか、誰にも話してなかったのに、なんでリゼさん知ってたんだろう?)そのことに関する質問ばかりだった。

そして一通り質問が終わったようだ。

「あんた、なかなか面白いね。」

「いやあ、本当にね。どうしてこうなったのか是非知りたいですね。」

そうしたら、グラスを近くで磨いていたマスターが、突然口を開いた。

「ちよつと、これを飲んでみてくれないか。」

そう言つて渡されたのは、ワインだった。

「安心して、これは血を熟成させたものだから。」

鳥は、ニヤニヤしながら言った。

そう聞いて私は飲んでみた。とても美味しい。まるでワインのよ
うな味……ではなく、もうワインそのまんまではないか!?

「味はどうだい?正直に言つてごらん。」

マスターの目が鋭くなる。

「とても美味しいです。人間時代に飲んだワインそのまんまの味で

す。」

「この人、やっぱり適合者だ。」

鳥は、なおニヤニヤしながら言った。

マスターが口を開いた。

「これはワインだ。血ではない。そして私たちも何故かワインが飲める。喰種にとつてのコーヒーだ。私たちは勿論コーヒーも飲める。が、ワインも飲めるようになったらしい。そして、私たちの共通点は、路上にいる時、いきなり記憶が消えて、朝、起きたらベッドにいるということと、起きたら劇的な進歩を遂げているということ、そして、ワインが飲めるようになるという点だ。そのような仲間が集まってワインを飲む会をやっているのだが、実はその会を、今日やることになってる。もう直ぐ来るだろうが、君も入らないかね？」

言っていることに驚いた。が、同時に面白いと思った、同じ境遇のもの同士、情報交換してもいいのではと思った。なので、

「わかりました、入らせて下さい。」

とすぐ返事をした。そうしたら鳥が、

「ちなみに、この会では、あだ名で呼ぶことになってる。基本的には、CCGがつけたコードネームで呼んでいる。まあ、それがやだったら、後で適当にあだ名つけてあげるよ。」

と言った。その時、ドアの鐘がなった。

「……。」

「こんばんは。」

背の高い男と肌の白い女が入ってきた。

「皇帝と、侵食者、いらつしやい。」

「ヤッホー二人とも。」

二人ともカウンター席に来る。私の隣に女が来る。

「えっ、あの時の……。」

「はい？どこかでお会いしましたかね？」

声のした方、つまり上を見上げる。

その顔は忘れもしない、あの、助けた女であった。

「あの、襲われていた……。」

「はい。そうです。助けていただき、本当にありがとうございました。」

「いや、だから、あの男二人組がうざくて……君に感謝されるのはなんか筋違いな気がするよ。」

「いや、どういう経過があったとしても、私を助けていただいたのは事実なのですから。」

「……んじゃあ、そういうことにしよう。」

「では、何かお礼をさせて下さい。」

「えっ、ええつとねえ……。いいワインをあとで紹介してください。」

「わかりました!」

鳥がニヤつきながら、

「また侵食者つたら裏表ありすぎ。もうこれから仲間になるんだから裏出してもいいんじゃないかな?」

「えっ、仲間に……?」

そこで蠍王が、

「この人はワインを飲める喰種だ。そして、仲間になりたいと言っている。あと、この喰種を気に入ったので、この会に入れる。異論はないね。」

皇帝は頷いた。そして、侵食者も、

「……はい。わかりました。というわけでよろしくね、ええつと……」

「どうしようかね。」

「今日、絡んできた男たちが『悪魔』とか、『死神』とか言っていたけどな。」

「初対面なのに早速失礼だな、おい。さっきの態度はどこいった?」

「それが、この世界での君の運命だよ。」

「酷いなあ。というか厨二病かな?」

「あなた、力強そうよね。」

「なぜいきなり会話が飛んだし!というか勿論君を助ける程度には強いしー。」

ここで、皇帝が口を開く。

「力、運命、死神、悪魔、世界。Strength、Wheel of

Fortune、Death、The Devil、The World。」

マスターも口を開ける。

「タロットか。」

鳥もなお一層ニヤニヤしている。

「タロット占いなら、マスター、得意ですよね。」

「まあ。」

「どうする、凱くん。タロットからあだ名つける？」

「いいですよ。別に。というか、それ以外つける方法知らないでしょう？ 私のおCCGでの呼び名なんて知らないでしょう。まあ、私も知りませんが。」

「まあね。今日は珍しくパソコンとか持ってこなかったのよ。充電中なのよ。」

「どういうこと？」

「自己紹介の時にね。取り敢えずいいかしら？」

「うん良いよ。」

「では、マスター。」

「はいよ。」

「ジョジョでもこのシーンありましたね。」

「まあまあ。では、説明するよ。君の暗示を見るため、4枚カードを引いてもらうよ。そして、最後に引いたカードの暗示を君の名とする。良いかね。」

「The High Priestessとか、The Empressとか、The Loversにならないと良いね。」

なおニヤニヤしている。

「口を挟むな鳥。では、始める。」

「はい。宜しくお願いします。」

マスターは、裏から、タロットカードを取ってきた。そして、私にカットをさせたり、ストップと言わせたり、様々な操作をした。

「こんなに操作ありましたっけ？」

「私独特のやり方だからね。しかし、結構当たらしいんだよ。」

そして、カードが、4枚残った。

「まず、左のやつをめくってごらん。」

「XV 悪魔 The Devilの逆位置」が出ました。」

「なるほど。ここでは、覚醒や、新たな出会いを表しているのかな？
次、左から2番目のカードをめくってごらん。」

「I 魔術師 The Magicianの正位置」が出ました。」

「ふーん。ここでは、可能性、チャンス、才能などかな？、次、左から
3番目のカードを。」

「XXI 世界 The Worldの逆位置」が出ました。」

「これは、伸びしろかな？でもなんかピンとこないな…まあ良いや、で
は、最後の一枚、君の名前のカードを引いて下さい。」

めくったそこには…

「XIII 死神 Deathの正位置」。

「なるほど、わかったぞ。これは、あなたに対するものではなく、前の
カードのもの、つまり、この間違った世界に対するものだね。要する
に、この世界の終末、停止、終局を表しているということか。なるほ
ど、この世界に大きく影響を与えるのか、死神（デス）くん。」

「死神」か。この世界を変えらるということか……。気に入ったよ。私
は「死神」だ。」

「よし、では、名付けも終わったことだし、自己紹介でもするか。私は、
『蠍王（スコープオンキング）』だ。マスターと呼んでくれれば良い。
覚醒前は、甲赫1つと尾赫1つだけだったが、覚醒後は一気に、羽赫
は2つ、甲赫は2つ、鱗赫は、8つもある。尾赫は相変わらず1つだ
が、赫者になれた。覚醒前のモードと覚醒後のモードを、使い分けら
れるけどね。まあ、羽があるから、突然変異した蠍だと思ってくれれ
ば良いよ。宜しく。」

「次、『烏（クロウ）』ね。こんな名前、CCGがつけたら、みんなが使
い始めて、仕方なく諦めて使っているだけですけどね。羽赫が2つ、
甲赫2つです。覚醒後は、とても早く飛べるようになりました。お陰
様で、情報はとても早く集められるようになりました。ちなみに、趣
味は、情報収集です。特に、人と話すことです。」

『皇帝（エンペラー）』だ。タロットカードのIVからとったわけではない。CCGが、私の赫子と帽子を見て、ナポレオンのようだと言い、それが広がったので、皇帝と名乗っている。今は、甲赫2つと、鱗赫4つだ。ちなみに、覚醒したら、鱗赫が、4つ増えたということだ。宜しく。」

「私は、『侵食者（ハッカー）』です。可愛くない名前の理由は、よくCCGのサーバーに、「Mentha arvensis var. piperascens」という可愛い名前でお邪魔していたら、なぜ変な名前をつけられたからです。鱗赫は1つです。覚醒後は、赫子から電気を流すことができるようになりました。いわゆるシヨック系女子？ですね。取り敢えずよろしくね。」

鳥がまだニヤニヤしながら話す。

「大事な話してないんじゃないのかな？例えば引きこもりだとか……。」

「別に良いでしょ！そんなの。」

「なるほど、だからこんなに肌が白いのか。」

「まあね。良いでしょ。」

「は、はい。」

「面白い。」

「では最後に、死神宜しく。」

「はい。私は、『死神（デス）』です。駄洒落じゃないです。覚醒前？でしたっけ。は、人間でした。それがなぜか喰種になっていました。赫子は不明です。なにせ、手のひらから出ているので……。医大生やっています。宜しく願います。」

「赫子の種類がわからないだど？しかも元人間？面白いじゃんそれ。」

「どれ？赫子みーせて。」

「まあ、良いかな。」

と言いながら、大鎌を出す。

「本物の死神だ。」

「本物見たことないけどそれっぽい」

「なるほど……。」

「どうしたのですか？マスター？」

「いや、なんでもない。まあ、たのしんでいってくれ。」

「はい。」

そうして、わいわい騒ぎ、みんなと連絡先を交換してから帰った。

回想からようやく覚めた。というわけで、ワインが飲めるのに気がつくまえに、ギリギリ捨てなかったワインを飲む。これは安物だが、とてもうまい。一万円を切っている。

それを飲みながら、考えにふける。よくよく考えてみれば、みんな共通点を持っている。私とも。つまり、みんな、Kに会ったことがあり、そして何かしらの能力とワインを飲むことができる能力を授けられて、記憶を消されたということだろう。他の人には話すといった意味がわかった。つまり、後から他の人と話すために、ネタバレさせないようにしたということだ。なるほど。

まあどうだって良い。取り敢えず今は、ワインを飲むことに集中しよう……。

8. 自分の再確認

水曜日の朝9時55分、マンションの前に立っている。

「ピンポーン」

「……。」

1分ぐらいしてから

「ピンポーン」

「……はい。」

「母さん助けて！ではなく、俺だよ俺。約束忘れたのか？」

「ヴェアアアアアアアアア！ちよつと応接間で待ってて！」

「はいよ。」

ガチャツと音がしたので中に入る。そして、応接間に座っている。

ガアアアという音が聞こえる。ギャーオスとかいう変な音も聞こえる。

そして、9時59分48秒になった。

「おまたせしました。」

「何やってたの？」

「印刷するの忘れてた。」

「まあ、間に合ったし良いんじゃない？というか間に合わなくても別に俺はちよつとぐらいだったからね。」

「ちよつとって何時間？」

「360分の1時間。」

「それって10秒じゃん……。」

「というか、お前さ、服装が……。」

「パジャマだけど何か？」

「いや、なんでもないです。」

「というわけで、中ぜひ見てよ。」

「はいよ。という前に、ほいよつと。」

通帳を投げる。

「キヤツチ、つと。もうちよつと大事に扱うべきなんじゃないの？私の扱いといいね。」

「通帳を人に預けるバカに言われたくないね。」

「だってめんどくさいんだもん。」

「やっとなんかのこと言ったなこいつ。」

「はっ、素が出てしまった。なかなかやりますね、あんさん。」

「元から出してるだろ、とういかなんだよ、そのあんさんとか。」

「まあまあ、取り敢えず、取り敢えず。見ての一言につきますね。」

「はいはい。」

紙の束の厚さは0.5cmぐらいある。表紙には、「死神(デス)について」と書いてある。

ページをめくる。そうしたら、青山がわざわざ読み上げてくれた。「人間……賢剣 凱(けんけ かい) 22歳。9月5日生まれ。生誕時、重さ2887g、身長45cm。最初に言った言葉は、『だいたいよぶ』。幼稚園では友達を手下にして戦争ごっこをしたとか。小学校に入って、通信簿はオール3、テストは間違えたことはわざと間違えたこと以外なし。体育は特にバスケがすごく、5年生にして部活の選手になったららしい。ただ、チームメイトが弱くて県大会止まりだったらしい。」

中学は受験。特待生で合格。偏差値は70前後のところらしいな。共学が良かったとか。

中学でもオール5で、テストは全教科10位以内で、10教科中5教科は1位だとか。学業以外の面、例えば、性格は、もうそれはよいやっだったらしい。こんな、なんでもできる奴は基本的にハブられるはずだが、明るくて、優しく、面白い奴だと思われていたので、逆に友達が多かった。が、実態はとてつもなく残虐な性格の持ち主。例えば、その住んでいた地区と学校の地区の犬や猫などの変死体の数が、普通より多いとか。後、学校で友達に『なぜそんなにカッターの使い方がうまいの?』と聞かれたことがあるとか。まあ、そこから色々なことが想像できるね。

んで、バスケ部は相変わらず県大会止まり。

ちなみに伝説としては、陸上部員に陸上競技で勝ったり、サッカー部員4人対1で、余裕で10分の中で6シュート入れたとか。あの成

績のくせに勉強は家で宿題以外したことがないとか、図書館の本は全部読み尽くしたとか。

高校1年の時に、チンピラから金を巻き上げること 시작했다。この頃から1日1時間勉強することを覚え、テストで全教科全て3位以内に入ることができていた。

そして高校2年生。チンピラを強請っていたら、ナイフを取り出され、斬りつけようとしたため、逆にナイフを取り、いよいよ刺し殺してしまった。それで、なぜか知らないが、解剖をして、体を食べ始めたらしい。それにそのまんまの意味で味を占め、年に2人のペースで殺つたらしい。これは、喰種から聞いた話だからね。これが喰種ではなく、人に見つかっていたなら終わっていたね。しかも、喰種もその時はお腹が空いていなくて、凶暴ではない時に見つかったのでそれも幸運でしたね。

でも、そんなことなど色々あったにもかかわらず、最後の学校内の試験は、全教科全て2位以内、全教科総合点は他の人たちを引き離して1位。しかも、最初のほうに言ったので効果が薄れていると思うが、ここは、中学受験時偏差値約70のところだ。明らかに頭が良すぎる。

そして、国内最難関、帝都大学の医学部に合格。そこでも成績をトップで維持。現在奨学金で生活している。

その裏では、人の肉を喰種から買い取っていたらしい。あと、非合法的な賭けとかで、人肉の買う資金を稼いでいたらしい。特に、トランプ系は、イカサマが得意らしく、否、ばれたことが一回もないので、イカサマだと思われるものがともうまく、最近皆さんやらなくなっている。知らない人と、見破ろうとする馬鹿と、逆にこっちがイカサマして引つ掛けようというか大馬鹿を除いて。

まあ、いろいろあつて半年経つた頃、また人殺しがしたいという欲求が始め、ナイフを持ってその辺を物色していたら美味しそうな(?)女の人を発見、襲つたらリゼさんだったとき。刺したら、ナイフは折れ、リゼさんが振り向き、赫子を出して腹に一刺し、トドメを刺そうとしたら、突如その2人の周りを白い何か、包み込み、その白

い玉が霧散したら、2人の姿はなかったということをして、とある喰種が見ていたらしい。どういうことですかね？

まあ、その1ヶ月後、口以外を覆う黒い仮面をつけた男が、その辺を暴れまわっていたらしい。CCGのレートづけに詳しい喰種によると、『ありや、Aくだな。』と言われていたらしい。

賭け事はあまりやらなくなったらしい。代わりに、人の肉を売る喰種に、人肉を売る行為したりし始めたらしい。(ちなみに、その黒い人のせいと思われる犠牲者は、半年で、人は50人以上東京全域で行方不明になったらしい。喰種も35人弱ほど。捜査官も5人ほど犠牲になったらしい。さすがに『半年』でだが。)

さらに1ヶ月が経つと、『Antares』に入る様子が確認されている。しかも週2回ほど。この頃から『死神(デス)』という名前を使い始める。名付け親は、タロット名付けの名手、蠍王。

そしていろいろあって現在に至ると。」

「とてもわかりやすい解説、本当にありがとうございました。というか、どうやってその情報集めたの?」

「ネット、ハッキング、友達の証言、実地調査かな?」

「怖えよ。というか、すげーなお前。」

「でしよでしょくもつと褒めてもいいんだよ?」

「そんな言われるほど褒めた覚えはないのだが?」

そしてそんなたわいのない会話が終わった頃、

「ところで、こんなによくできたものに追加報酬をあげたいと思うのだが……。」

「なにになに?」

目を輝かさせている。

「はいよ。」

バックの中から取り出したのは、ワイン。

「これは、『アンリジロー キュヴェ フュドシエヌ1999』という、そこまで高くないワインだよ。イギリスやモナコの王室御用達の品

だそうだ。」

そうしたらむすつとした顔で質問して来た。

「大体35000円位。正解?」

「正解。よくわかったね。」

「10000円超えてるじゃん。それを安いとかいつちやダメだよ。」

成る程、怒っている理由がわかった。申し訳ないなと思った。

「はい。すみませんでした。」

そうしたら明るい顔に戻って、

「白ワインか。一緒に夕食でも食べるか?」

「一緒につて、えっ?」

「一緒に食べようよ。つて言っているの。」

「でも……。」

プレゼントしたただけなのに逆に料理を振舞われる。何か申し訳ない感じがする。が、

「お願い。」

上目遣いでそんなこと言われてしまったらな……。

「わかった。いつだ?」

「そうだな……。今日の20時。」

「オケ。ちゃんとそれまでにきっちり着いてるからな。」

「わかった。」

「では、一旦お暇します。」

「じゃあね。」

一旦、その辺を散歩しながら昼飯を食べ、また散歩して公園で日向ぼっこしたりと有意義(?)に過ごした。

そして約束より3分前の19時57分になった。

「ピンポーン」

「yo—ho。」

「やけに発音いいな、おい。」

「とりあえず、料理の用意はしたから入って。」

「はいよ。散歩して来たからとても腹が減っている。」

「o k a y .」

「だからなんなんだ？その発音。」

「まあまあ。座って座って。」

勧められるままにダイニングルーム、いや、ここは流れに則って dining room、とでも言おうか、に案内された。

もうすでに、そこにはローストされた肉が皿に盛り付けてあった。

「とても美味そうだねえ。ちなみになぜわざわざローストしたのかな？」

「いや、ワインに合う方とかに、roast chicken が合うと聞いたから。」

「へえーよく知っているね。というか、また英語かよ。昔、英会話教室にでも行っていたのかい？」

「なぜそう思う？」

「発音いいから。」

「そう？褒めてくれてありがと。」

「褒めたのかな？俺は。」

「では食べようか。」

「オーケー。」

ナイフをとフォークを持ち、ローストした肉を切り、口に運ぶ。

「いやー美味しい。どうやって手に入れた？というかどういう人？」

「企業秘密。教えな〜い。」

「えー。まあいいや。」

その後無言で食していた。

再び喋り始めたのは片付けを手伝っていたときだ。

「ところでこんなものを作らせたということは何か問題でも起こすんですよ？」

ひどい偏見だな、と渋い顔をしながら、

「まあね。」

「組織に入るが半分正解とはどういうこと？」

「カフェに入れてもらおうかと。」

「喰種が経営者とか？」

「ああ、その通り。というか働いている人全員喰種だよ。」
「そういうと、侵食者が、」

「へえー、面白そう。んでなんでそんなところ入るの？」

「夢のお告げ、かな。」

侵食者があはははと笑う。

「あの賢剣がか。そんな科学的でないことを言うなんて。」

「まあまあ。良いじゃないそんなことを信じたって。そもそも喰種
だって一昔前は都市伝説だと思ってたし。そんな科学的でないもの
になってしまった俺氏。」

「馬鹿だね、火のないところに煙は立たないんだよ。無理やり火を見
たように思わせているのもあるけど。」

「まあまあ、昔のことだよ。」

「んで、夢のお告げでは、何しろと。」

「俺のCCGのレートを上げろと。」

「へえー。ではどうやって上げるの？」

「CCGの支局に乗り込む。」

9. 質疑応答

今、家でまったりしている。詳しく言うと、快適な部屋で本を読んでいる。まあ、読んでいる本は「黒蜥蜴」だが。あの、江戸川乱歩のだ。

一週間前、「CCCGに乗り込む」発言は、色々言われて帰ってきた。

「えっ、アナタナニイッテルノ？アタマダイジョウブ？」

「お前こそ片言になつているよ、大丈夫か？驚き過ぎだよ。」

「モウイツカイイッテ。ナニヲイツテイるか分からない。」

「後半正気になつてきたな。CCCGに乗り込むつもりだよ。近々。」

「えっ、だつてだつてCCCGに乗り込むとか言ってるんだよ。自分で何言っているかわかっているの？」

「そりや勿論わかつているよ。敵の本拠地に乗り込むって言つてるということでしょ。」

「そうだよ、喰種を殺すことのできる力を持つ奴らがたくさんいるところだよ。」

「うん。」

「しかも戦いの情報とかがたくさん取られるんだよ。わかっているの。」

「そこは何となくだけど、わかっている。」

「あなた一体とたくさんさんの喰種捜査官との戦いになるわよ。無理に決まっているじゃん。」

「そこは何とかする。人数が50人越えようとも。」

「待った、50人つて……。あなた、どこに攻め込むつもり？」

「勿論一番守りが固いところ。つまり本部だと思う。」

「はあ？えつとあなたは守りが固いの意味知っているよね。守りが固いということはそれだけ難易度が高いということだよ、しかも本部とか一番そういう対策してあるところでしょ？」

「うん。勿論。だつてそうしないとレート上がらないじゃん。」

「いやいやいや、普通に考えてそんな危険な方法取るよりもっといい方法があるでしょうが。普通に白鳩狩りとか、証拠を少し残して大量殺人するとかさ、しかも守りの固いところとかそれこそ意味ないじゃない。」

「いや、危険なところに行ってみたくてですわ……。」

「そんなところ行って何の意味があるの？」

「いや、力試しで……。」

「おいおいおい、力試しして死ぬつもりかいな。死んだら元も子もないでしょ。ねえ。死んじやだよ……。」

私はここで息を吐き、吸い、そして言う。

「私が死に行く人間、もとい死に行く喰種に見えるかい？まさか。私が弱いとでも？私は強いはずだ。ちゃんと負けそうになったらここに帰ってくる。いや、ここだけではなくAntaresにもだけどね。勿論勝ってここに帰ってくるから、大丈夫、安心しろ。」

そして侵食者の目を見つめた。あちらもこっちの目を見てくる。6秒ほど見つめた後に根負けしたように侵食者が目をそらす。

「わかったわよ。大馬鹿者のあなたなんて知らない。もう、ついでに一番守りの固いところ調べてやるんだから。全体死ぬんじゃないよ。」

「そう言えばそうだな。調べるの忘れてました。というかお前の気持ちは俺のことを知らないのか？それとも死なないで思っているのか？」

「五月蠅いわね。別にどうだっていいでしょ。」

「ふっ、ツンデレか。ありがとう。」

「ふうんだ。」

と言いながら侵食者は台所から外れた。そして、5分後帰ってきた。

「はいこれ、資料。好きに使いなさい。」

「早っ。まさか5分で？」

「まあね。」

「マジか。ありがと。」

「んで、洗い終わった？みてるかぎりおわったっぽいね。あつ、そういうば今更だけど、おかわりいる？」

「遠慮しておくよ。とても美味しかったけどね。」

「ありがと。喰種の食事はバリエーションを増やせなくて困る。ワインに合うような料理はなかなか人の肉では作れないからね。」

「そんなに大変ならば普通に食えば？」

「ワイン飲まない時とかはね。ただ、ワインに生肉は似合わない。」

「何だよ、美食家（グルメ）かよ。」

「いや、まさか、喰種にそれをやる資格はないのよ。残念ながら。」

「そういうわけではないと思うけどな。」

「そういうたわいのない話をして幾分か時間がすぎた。」

「では、私はこれにてお暇させていただきます。」

「そういうと、侵食者は、

「わかった。またいいワインが入ったら一緒に飲もうね。」

「わかった。」

「帰り支度をしながら話をする。」

「あ、そうだ。もしも危なくなったら呼んで。私たちも加勢に行くよ。」

「そうか。そんなことになったら。呼ぶかもしれない。多分二週間以内にはやるから。」

「OK。騒ぎがあったら近くで待機しているよ。」

「じゃ、派手に騒ぐよ。」

「わかった。」

「玄関に行つて

「ではさよなら。もしかしたら、二週間後。」

「じゃあね。もしかしたら、二週間後。」

「そして、侵食者宅を出る。」

「的なことがあった。そして今日に至ると。」

「まあ、この一週間は、地下に潜ったりしてひたすら赫子を動かして

体を慣らしたり、他の区に行つて非常食を手に入れたり大変だった。

そういえば、赫子の特徴を言つてなかつた。

地下に潜つたりしているときに様々試したが、凄い。

私が新たに手に入れた赫子は糸をモチーフにしているようだ。なぜだかは知らないが。(前、Kと戦つた時にKが持っていた赫子に似ている。)

まず羽赫。これは、ほつれた糸をモチーフとしているらしい。主な使用法は、ほつれた糸を飛ばすことだ。ぶつけてもいいが、あまり強いダメージを与えることができないらしい。(広範囲に刺した跡が付くが。)どちらかといえば糸は相手に刺さつて痛みを加えるのが目的のようだ。相手を怯ませたり、動きを止めたり、雑魚を仕留めるぐらいにしか使えないだろう。個人的には結構面白いと思うが。

次に甲赫。これは、多分金属の糸をよつたものをイメージしたものでしょう。これはとてつもなく硬い。しかも重いので打撃にも使える。ただ、固いだけとても動きが鈍い。もつとしなやかに動かないと実践に使うのはきついだろう。

ただ、硬いので、守りにも使えるだろう。

これは割と好きだけど、扱いづらいと思う。

そして鱗赫。これが一番糸っぽい。これは割と柔軟に動くし、たくさんあるし一番扱いやすいと思う。あとこの糸、1回目、よつて擦つてあるやつをばらけさせることもできるので、刺したら傷口を大きくするために広げることもできる。ただ、欠陥としては脆い。ちよつと強度の強い糸のようだ。多分甲赫とやりあつたらこつちが壊れるだろう。

この赫子が一番好きだ。

最後に尾赫。これは、先が3つに分かれている。そして、これは機動性が高い。そして、とても精密だ。だから、素早い動きをする赫子もガシツと捕まえることができる。ただ、そこまですごいところではない。長さもあまりないし、硬くもなく、打撃にも刺すのにも巻くのにも切るのにも使うのは難しい。掴む専門、といったところか。しかし、掴んでもそこを引きちぎることはできても握りつぶすことは難し

そうだ。まあ、クローするみたいに、切るならできるとも思えないが。まあ、後は、前からあったブラッドフラワーと手のひらから手を出す奴、あっ、名前を決めておいた方がいいとKは言っていたな……。うーん……。取り敢えず、WW. にしておくかな。Double Weapons。ダサイけど。

取り敢えずWW. は、様々な武器が出せる。

剣だけでも長さ1.5メートル近い大剣と、日本刀、短刀と西洋の剣（刺す用のアレ）とたくさん種類がある。

あと槍とか、鞭とか、変な形をした機関銃とか（ガトリングの周りの部分を無くしたような感じ）、狙撃銃とか、拳銃とか、ブーメランとか、ナツクルとチェーンソーもある。スタンガンも鎖の先に重りがついているやつもある（ボールにトゲトゲが付いている奴と電気が流せる奴の二種類が付け替え可能）。と思つたら、大楯まである。

何これ、強すぎると最初思つた。

無論、今も強いと思つている。ただ、あまり有効活用できていないと思う。だつて、武器が多すぎてどれを使つていいのかわからないないんだもん。（なんだこの「だもん」って？）いや、なので基本的には適当に順番を決めてやつている。まあ、それでも今まで負けなしなのだけどね。取り敢えずこの武器の詳しい紹介は別の機会にしようと思う。

取り敢えず、こんな感じの装備でCCGの本局（資料見たら本部ではなく、本局というらしい。）を攻めに行こうと思う。（そんな装備で大丈夫か？大丈夫だ、問題ない。死亡フラグかな？）

大体の作戦は、こんな感じだ。

まず、本局のある1区へ向かう↓入つていったあと、局の人が制止させようが何しようがRCゲージを通る↓音が鳴るから、一般人が出口へ向かう。俺はそのまま上を目指す。多分白鳩が襲ってくるけど、できる限り武器を壊して進む。殺すより、無力化させる方が強そうに見えるからね↓CCGの局長に会いに行く↓会つたら、レートを上げ

てくれと頼む↓上げてくれたら普通に帰る、上げてくれなかったら納得できる答えがこない限りみんなみんなS・A・T・S・G・A・I
する↓帰る

的な感じだ。さあ、うまくいくでしょうか？

はあ、やっと読み終わった。最後あんな終わり方するなんてな。まさか（この部分は校閲されました）なんてことが起きるなんて。

「さて、いよいよ明日だ。凄い気分が良い。最高にハイってやつだ！」
ああ。いつてなかったけど、今日は土曜日。決行は明日ね。ちゃんと侵食者には連絡したし。もう忘れたってことはないはず。では、明日の遠足のために寝るか。

10. CCGに突撃①

さて、今日の前にでかいビルがある。時刻はもう少しで17時だ。侵食者にはもう連絡もしてある。服装は動きやすい黒い服だ。仮面をポケットの中に入れておく。(仮面は結構前に4区の「HYSY ArtMask Studio」で作ってもらった。ガンダムのシヤアが付けている様な仮面に鼻を隠す部分がついた様なものだ。仮面を作るときにそのウタとかいう店主は、様々な質問をしてきた。まあ、気が向いたら記す。)実はもうすでに、使い捨てのマスク(ハリウツドとかで使えそうなレベル。これも「HYSY ArtMask studio」で貰ったやつだ。結構たくさん種類があるからいい。)を付けているが。

の前に見ておきたいものがあつた。喰種の情報提供を呼びかけるポスターだ。私のものは……あつた。けどこれ、ほとんど喰種を殺したやつではないか。まあ、最近はブラッドフラワーで食べてばかりだから、服の跡の様なものしか残らないが。でも、その辺に飛び散っている血や、その場所に残ってる赫子痕から、相手は喰種だとわかるはずだ。全く、CCGは何を考えているのだろうか。いや、逆に考えるんだ。そうまでして私を捕まえないということではないか。ならば、レートを上げるチャンスではないか？

少し楽しい気分になってきたところで、そろそろ中に入る。

自動ドアを開ける。目指すは奥にあるRCゲージだ。横にある受付嬢に、「何か用で……」という声を無視する。周りにはそういう箱を持つていない普通の職員と情報提供をしている感じの一般人しかない。というわけで、どんどん先に進み、後ろから警備員が追いかけてくるのも構わずいいよRCゲージをくぐった。

「ピュピュピュピュピュッ!!」

音は鳴ったが気にしない。どんどん前へ進む。後ろから「キヤー」という声や、「ドタドタ」とだんだん遠ざかっていく音、「みなさん、出口に急いで、なおかつ走らないで逃げてください。」などという声も聞こえる。本来なら、ここでマシンガンでもぶっ放したら楽しそうだ

が、（とは言っても20人ぐらいしか人はいないが。しかもほとんど職員。）今はそんな時間はない。ぐんぐん前へ進んでいく。今頃上の階では、

「何の騒ぎだ？」

「喰種が侵入した様です。」

「何体いる？」

「それが……だったの一体です。」

「はっ？そいつは命知らずだな。よし、3人も入れば駆逐できるだろう。じゃあ、行くか。」

とかいう話になっているはずである。まあ、取り敢えずエレベーターに向かう。

とか思いつながら歩いていると早速警察機動隊の様な人たちが銃を持ってしゃがみ、行く手を阻んでいる。（対応が早いな……）と思いつながら、後ろを見るともうすでに後ろの人たちはみんな避難している。まあ、これから俺を蜂の巣にするつもりだろうと思いつながら、ポケットから仮面を取り出し、顔につけて、一言言う。

「やあ、みなさん。私は「死神（Death）」だ。以後お見知り置きを。ところで、局長室まで案内してくれる方はいらっしやいませんか？色々お話がしたいのですが。案内してくれば、無駄な殺傷はしなくて済むのですが。」

みんなお互いの顔を合わせる。どうしようかと考えている様だ。まあ、まだ命令が出ていないから攻撃できないと言うのもあると思うが。

「何を考えているんだ！攻撃用意！」

白いアタッシュケースを持った男が現れた。年は30歳、誤差±3歳ぐらいか。多分階級は下の方だろう。恐らく、私が侵入したときに、赫子を出していないこと、仮面をつけていないこと、そして何より見慣れない喰種だったので弱いと判断され、訓練として若い子が出てきたのだろう。

「やあ、喰種捜査官。私は「死神」。頼みがあるんだが、ここにいる、僕に銃を向ける人たちに銃を下げてもらえる様に言ってもらっていい

かな？後、局長室まで案内してくれると嬉しいんだけど。局長にお話があつてね。」

すると、捜査官は怒った様に、

「お前の話を聞く必要はない。RCゲージを通って反応した時点で君は喰種であることは確実だ。つまり、処分しても大丈夫そうだ。それとも情報提供に来たのか？」

「局長とのお話次第ですね。」

「では、今からお前を生け捕りにする。」

「話が噛み合わないね。」

「後ろ、攻撃用意！私が合図したらいつでも撃てる様にしておけ！」

「二はいっ！二！」

「はあ、話の通じない奴は嫌いだ。まあ、取り敢えず死ね、と言いたいところだが今回の趣旨は殺してはいけないということなので、気絶させてやる。」

「うるさい！喰種風情が！今からお前を逮捕する！」

白いアタツシユケースを起動させ、そこから刃渡り60cmぐらいの剣二本を取り出した。

鋸と洋刀に近い形だと思ふ。洋刀の少し細長い奴で、歯が両側についている感じだ。それが二本。勿論両手持ちだ。

さて、それらを構えながら走りかかって来た。

「ほう、二刀流か。それでは私も。」

右手から西洋風の剣（「ジョジョの奇妙な冒険 第3部 スターダストクルセイダーズ」に出てくるポルナレフのスタンド シルバーチャリオットの持つている剣の様な形だ。）、左手から鞭（結構伸縮自在。最大5mも伸びる。）を出す。

そして、一方が右下から来たので、剣で止めて、もう一方の左下からの攻撃は鞭で腕ごと絡め取る。

相手は左手を動かしているが、なかなか動かない。

「なにっ？！」

「これで左は動かない。」

「くそッ！」

相手は、もう一回攻撃するため、剣を一回上に上げる。

そこで、胸元が開いた隙に右手をスタンガンに変え、ひと突き。

「ウグアアアア―！」

倒れた。

「これが剣だったらどうするつもりだったのでしょうか？こいつは何回でも殺せるな。単純馬鹿めが。」

体をやや乱暴だが、すぐ左にほっぽり出す。

そして、銃を構えている人たちに一言。

「次は君たちかな？それとも案内してくれる？」

一瞬の静寂があった。

「う、うわー！」

銃弾が飛んで来た。左頬に当たって地面と平行に赤い線ができる。釣られてみんな撃ってきた。

当たると痛いので、左手で大楯を作る。透明なので向こうが見える。

それで、少し間があるので、そこに右手で狙撃銃を作ってそこに入る。

みんな震えているのか、銃口は撃たれない。

そして、近づきながら銃に向かって撃つ。

だんだん「カンカン」という音が消えていく。

そして、完全に音が消えたとき、みんな立って、盾を用意していた。「死にたくないでしょ？こっちも急いでるからそろそろ退いてくれな
いかな？そろそろ僕、キレルよ？」

手の武器を引っ込めながらそう言った。

これで退かなかったら真面目に大暴れしようと思ったとき、声が聞こえた。

「お疲れ様、みなさん。後ろに下がっていいよ。」

奥から、やはりこれも白いアタッシュケースを持った、少しガタイがいい、髪の刈りが少し独特な中年男性が出てきた。

11. CCGに突撃②

なんかさっきの喰種捜査官より強そうな奴が来た。

まあまあ、権力の強そうな人だ。

「丁度いいや。あの、その白いアタッシュケースを持った髪型が特徴的なその人。そんなこと言わないで、局長に話しさせてくださいよ。」

「そんなに頭、特徴的かな？んで、なぜ話したいのかな？」

「諸事情により私のレートがS+まで上げなくてはいけないからです。その交渉をしようかと思って。」

「ふざけた理由だな。丁度いい。特等一人と対等に戦えるのがS+レートの基準だ。私が戦って君を倒してあげよう。」

「私は生きて帰りたいのですがね。では、その周りの人たちを危なくないところに避難させてください。」

「私は死んでもいいと？」

「大丈夫です。殺さない程度にボロボコにしますから。」

「そうか。というわけでみんな、安心して下がっていいぞ。ではなく、やっぱり下がって。これは命令ということだ。」

みんなようやく後ろに下がった。

「ありがたいですね。」

「仲間にはできる限り死なれたくないからな。」

「では始めましょうか。」

「そうだな。」

相手はクインケを起動して、少しでかい鉈を出した。

「あなたのクインケ、大きいですね。」

「ありがとよ、褒めてくれて。」

「んじや、私も。」

左手から、太刀を出す。(こいつは、ほんとに太刀をでかくしたバージョンだ。長さはなんと、2mもある。驚き桃の木20世紀!)そして、両手で構える。

「デカっ。というか、手から武器が……。」

「でしよ。じゃあやりますか。そちらからどうぞ。」

「まあ、やってみるか。初手ありがとよツと！」

と言いながら鉈を振るいながらこちらに飛び出してきた。勿論太刀で抑える。

「その体のくせに素早いですね。」

「これでも喰種捜査官なんでねツ！」

相手が鉈にかける力を緩めたので、こつちが太刀で相手を押す形となり、相手がその反動を使って後ろに下がった。

そしてこつち側にもう一回攻めてきたので、太刀を上から下に振るう。こつちの方がリーチが長いし。

そうしたら、相手はジャンプしてよけ、上から切ろうとしてくる。

当たると困るから、そのまま太刀を下に振るい、その反動でジャンプする。(その時に、太刀と手のひらから出ていた線を切って、太刀が砂のようになって消えてった。線とつながっていないと消えてしまふのだ。)

相手が着地した頃には、逆に私が上になっていた。

そして、右手から大鎌を出す。

それで、上から振り下ろす。

が、相手は勿論横に避け、鉈を振るう。

こつちはリンボーダンスのように体を曲がらせ、避ける。

そして体制を起こしながら、大鎌を振る。

相手は後ろに飛び退く。

「君、なかなかのものだね。今まで名が知られていないのが不思議なぐらいだよ。」

「そうですか？お褒めに頂き光栄です。ではS+レート認定ですか？」

「いや、頑張れば倒せそうだからなしかなく。」

「ほうほうほう。まだやりますか。」

「どちらにしろ、強いことには変わりないし、これからすごい成長して強くなりそうだから、早めにその芽を摘んでおかないと危ないでしょ。」

「そうですか。なら、まだやりましょう。」

「いいとも。」

また切りかかって来た。ので、今度は右手にナックルを出す。そして、例の如くナックルで抑える。

「同じ手ばかりですね。」

「全くラチがあかないな。このクインケさあ、尾赫なんだけど、その君の手から出ているその赫子は何に当たるんだい？」

「私にもよくわからないんです。少なくともこれは鱗赫ではないですね。そうだったらとつくの昔にこれは壊れているし。だからと言って、羽赫ではなさそうですし。」

と言いながら気づいてしまった。これは「赫者」になった時に出てくるものではないかと。Kが言っていたのはもしかしてこのことだったのではないのかと。

「何かに気づいたのかい？」

「いやあ、それはさすがに教えられないですよ。普通の赫子じゃないんじゃないかとだけ言っておきます。」

「情報提供ありがとうございます。では、戦いに戻りますか。」

後ろに再びお互い下がり、また攻める。

私が相手の顔を狙おうとすると、鉈で止められる。もう一方の手で攻撃しようとする、鉈で抑えていた手を後ろにやられる。

ジャンプしながら両手で襲いかかろうとすると、鉈で止められる。

まあ、逆にあつちが襲いかかって来ても、片手で止める。で、片手では止められなくなるから両手で止めざるを得ない。

ある程度押す力が弱ったら、胸のあたりを突こうとする。

が、左に避けられる。そして、後ろに下がる。これの繰り返し。

「対人戦の様な物には慣れていないんですね。」

「そつちも全然大口叩く割には全然倒せないじゃないか。」

「ハハハハハ。」

「ハハハハハ。」

口では笑っているが今とてつもなく焦っている。どうやってトドメを刺そうか。いや、トドメを刺してはいけない。あくまで人を殺さ

ない様にするのが今回の自分で決めたルール。だからと言って頼んでもここを通してくれそうにないし、ゴリ押すことも無理そうだ。ああ、どうしよう。

そこにさらに悲報が舞い込んできた。

「遅いなど思ったらまだ戦っていたのかい。それで、そのボクイ、こんなところで遊んでいないで早くお家に帰りなさい。」

「これはこれは。手から赫子を出している。新しい種類の喰種ですね。これは結構戦いかたが違はずなので大変でしたね。」

「悪い悪い、すぐ終わると思ったんだが、結構手こずった。」

お仲間が二人現れた！

12. CCGに突撃③

困った。非常に困った。お仲間が現れた。しかも髪型が特徴的なおじさんと同じぐらい強そうだ。

ひとりは、やはりガタイのいい感じのおじさんだが、何と言ってもヒゲが特徴的だ。あと話し方。なんかちよつとやばそうなおじさんだ。

もう一方は、二枚目なシウルツとしたハンサムなお兄さん。(とは言っても30は超えてるだろう。)そしてどちらも白いアタツシユケースを持っている。箱持ちだ。

んで、話の内容からして多分同じくらいの階級だろう。

取り敢えずわかったのはヤバイということだ。なので、ポケットの中に入れておいたボタンを密かに押しておく。多分押したことはバレていないは……

「いま、ポケットの中に手を入れて何かしたよね？何をしたのかな？教えて欲しいな？」

「3分ぐらいだったらわかりますよ。」

「ではその前に終わらせようか。援軍もきた様だし。」

「オウケイ。さっさと片付けますか。」

「了解しました。左側を私は担当します。」

はあ、面倒なことになった。(というか同じこと何回言っているのだろうか。)

二人がクインケを起動し、変な口調のおっさんは丸い筒状のものを、ハンサムなお兄さんはこれはこれでかいかい太刀を出した。(どちらかといえば、こっちの方が、髪型の特徴的なおじさんの太刀より大きく、太い。けど、薄い。)

そして、右にハンサムなお兄さん、真ん中後方に変な口調のおっさん、左に髪型の特徴的なおじさんがいる。(そういえば女性がないな。イケメンもない。しかもこの人達鍛えてるんだらうけどあまり食欲そそらない。)

「ハイヤーッ」

変な口調のおっさんが持つ筒の底辺からエネルギーっぽいのが出てきた。勿論当たったらやばそうなので、避ける。というかこんなもの仮にも戦闘中だけどCCGの本部でやらかしているのかな？この人たち始末書とか書かされるのかな？

とかいう隙に右のハンサムなお兄さんが襲いかかってきた。

右手にチェーンソーを出して応戦。取り敢えず振り回しておけばなんとかなる。

と思つたら、死角から髪型の特徴的なおじさんが来る。

左手から日本刀を出して振り回すが、なかなか相手するのがきつい。上からくる太刀を避けたら、背後にもう髪型の特徴的なおじさんが武器を突き出そうと立っている。

ので、上に日本刀、おじさんの方にチェーンソーを向けて応戦。

日本刀を相手を振り、相手を後ろに飛ばせたあと、突きをしてさらに距離をとらせる。

同時に右手はチェーンソーを適当に振り回す。そうすると、やはり隙があるからそこを狙われる。

そこで無理やり手首を使ってチェーンソーの向きを変えて、その狙ってくるときの動線を切る。

そうしたら手をくねらせ、下に振るってくるので、元の位置にチェーンソーを戻す。

そうやると、踏み込めば危ないので後ろに逃げる。

そうやって一旦引かせたと思つたら変な口調のおっさんがエネルギーっぽいのを飛ばしてくる。その繰り返し。

しかも、体力的にもそろそろきつい。

「そろそろ大人しくしたらどうだねボウオ〜イ。」

「降参をお勧めしますよ。」

「そろそろきついんじゃないの？」

くそっ。もうそろそろやられるな。と思つた時、

「ピンピロリン♪ピンピロリン♪」

私のポケットから音が鳴る。

「なんだ？このサウンドウは？」

「相手のポケットの音の様ですね。」

「どういうことだ？まだ2分しか経っていないぞ。」

「1分間違えました。では、そろそろ帰ります。さようなら。S + レートの検討よろしくお願いします。」

「何を言っている……」

髪型が特徴的なおじさんが何かしゃべっているうちに、両手の武器を引っ込め、右手から、チェーンが伸ばしていた。その先には大きくて重いものが付いている（前記した鎖の先に重りがついたやつ）のを出し、天井にぶつけ、横に振った。

そうすると、上から瓦礫が落ちてくる。

「ではさようなら。またどこかでお会いしましょう。」

「待て！ボウオ〜イ！」

右手の武器を引っ込めながら、無視して出口に向かって走る。

そうして急いで外に出る。と、

「「ザッ。」」

という感じで外に銃を持った奴らがいる。幸いなことに箱持ちはいない。手配が間に合わなかったのかな？

さて、んであとは待つだけ。

銃を撃ってくる。左手から大楯を出して身を守る。後ろはあまり気にしない。

そうしながらあるものを待っていると、

「おい、後ろから暴走車がくるぞー！」

という声が聞こえてきた。

そう。これを待っていたのだ。そして、その黒い車は、銃に撃たれながらも（当たっていないのがすごいと思う）避けた人たちが作った道を通って、私の前に来る。

そして、ドアが開く。

「乗れ。」

皇帝だ。

「ナイスタイミング。」

勿論乗る。

皇帝がアクセルを踏んで逃げる。

銃で撃ってくるがあたらない。それは皇帝がくねくね曲がりながら走行してくれているからだ。

そして、裏路地に入る。こちら辺は防犯カメラがないから足がつかない。そして、空き地があるのでそこに車を乗り捨てる。

一応バレないことに越したことはないので、ナンバープレートを隠していたプレートを外す。本来のナンバープレートが現れる。

さらに、車体につけていた黒いシートを外す。

元の赤い車に戻った。

「お前、運転技術すごいな。銃弾が一つも付いていない。」
「……。」

これで、多分怪しまれない車となったはず。

そして、仮面を外し、マスクも外す。このマスクは食べることができ。美味しくはなかったが。

服を脱ぎ、ブラッドフラワーに食わしておいて、皇帝の上着を着る。

これで証拠は隠滅できたかな？

「よし。ではずらかるか。」

「ああ。」

そして、真下にあったマンホールを開ける。そして、地下に潜る。

(勿論蓋は閉めた。)

んで、2 kmほど歩く。

とても疲れていたのので、会話はなかった。あとで話すかわかっていたから話しかけてこなかったのだろう。

そして、上に出る。ここも人気のないところだ。そして、近くの駅から電車に乗って20区に帰ってきて、そのまま「Antares」に着いた。ちゃんと「closed」となっている。

扉を皇帝に開けてもらう。

「おかえりなさい。」

「その様子だと無事な様だね。」

「どんな感じだった？早く話聞かせて。」

「どうやら無事に帰ってくる事ができた様だ。」

「そのことにホッとしながら一言言う。」

「ただいま。」

13. CCGに突撃 反省会編

「ただいま」といったところですが一言。

「と言うわけでじゃあ、早速だけど寝るわ。すごい疲れた。上のベット借りますね。蠍王。」

「はいよ。」

「ええ、話が早く聞きたいな。」

「2時間後起こして。よろしく。」

「はいはい。ほんと自分勝手なんだから。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

と言いながらカウンターの中にある階段を登って右を向き、二歩ほど前へ出る。そして再び右を向き、右手方向手前から2番目の部屋に入る。

そして左奥にあるベットにそのままダイブ。

そして2時間後。

ベットから体を起こす。自然に起きれた様だ。

「はあ。よく寝た。そんな戦ってないのにすごい疲れた。んじゃあ、お話しに降りますか。」

「と言いながら扉を開けると、丁度鳥がドアノブに手をかけようとしていた。」

「悪い、よく寝たから今から行こうと思う。」

「全く遅いんだから。休んだぶんの話を早く聞かせなさい！」

「わかったからとりあえず下いかせてくれ。」

「はい。」

鳥が回り右をして廊下を歩き、階段を下る。その後ろに続いて私も廊下を歩き、階段を下る。そして一階に着いたのでいつもの席に着く。(カウンターですね。)

左隣に鳥、右隣に侵食者、その右隣に皇帝、前には蠍王がいる。

「はい、ワインとつまみ。」

蠍王が、赤ワインと爪を出してきた。

「アザス。」

「いやいや、私も話を聞きたいからね。」

「下心満載ですね。」

「それ使い方違うよ。その使い方だと蠍王、かわいそう。」

「侵食者は黙ってる。」

「……。」

そんなこんなしてたら烏が口を開いた。

「んじや、とりあえずあらましを語って。」

「はいよ。」

と経験したことを語る。

「……と言うわけなんですよ。」

「要は、普通に自己紹介して暴れて帰ってきたけど。収穫はほぼなし。白鳩は殺せてない。なんじやそりゃ!?!お前危険おかしてまでいった意味あつたのかいな?」

「まあ。強い。喰種捜査官との実戦ができたし。」

「多分髪型がおかしい奴と言葉がおかしいのは特等、二枚目は准特等だと思う。よく戦えたね。全く無茶して。」

「怪我はしてないけどね。」

「そういう問題じゃない。ねえ。侵食者?」

「ええ。全くその通りよ。何考えてるの?危なくなったらすぐボタンを押しなさいとっていただけでしょ。」

「いや、ちゃんと押しまし……。」

「強そうな人が一人でもいたら逃げなさいよ。実際一人だけでもとても大変だったんでしょ?全く。」

「はあい。」

「取り敢えず、話を元に戻して、アラームがなってから何分ぐらいで雑魚キアラが待機してた?」

「3分後にはいたからびつくりしたよ。」

「特等は？」

「さらに3分後。絶対舐めてて新人の手柄にしようと思ったけどで思ったより強かったからきたんだらうね。」

「うん。そんなところだらうね。」

「箱持ちの白鳩の動きはどうだった？」

「とても良かったね。肉体的にもよく鍛えられている。鍛えられすぎていて不味そうだけどね。」

「そうか。」

と言いながら鳥はワインを飲む。

私もつられておつまみをつまむ。

いっぱい飲み干して

「もういっぱい頂戴、蠍王。」

といった後、

「んじや、今回引き分けた、と言うか逃げられた要因は？」

「相手に対武器戦に慣れてなかった。舐めてた。人が少ない。かな？」

「なるほど。そいつらのそれぞれの印象は？」

「最初の下っ端は経験が少なかったから、もうちよつと人を疑うことを知るべきだね。あと、煽り耐性もつけるべき。剣の振りすじは良かった。」

「うんうん。」

「んで、髪がおかしい人は、地道に攻めてきてる感じがしたね。じわりじわりと。ああ言うタイプは結構隙を見つけるのが大変。戦いにくい。」

「なるほど。」

「言葉がおかしい奴はそこまで脅威じゃない気がする。けどあの武器注意だね。迂闊に近づけない。レーザーだから近くに行ってもダメだし遠くも狙われる。うまいかわし方が知りたいね。」

「ほうほう、それで？」

「そして、二枚目はあの武器つよい。あと持っている力も強いからあ

れは当たったら致命傷だね。でもまだまだ発展途上だね。」

「そうですか。雑魚キャラは？」

「論外。」

「オーケー、オーケー。じゃあ、中はどうだった？」

「壊したことしか覚えてないや。結構広いよ。」

「そんだけかい。それじゃ最後、」

「ざわざわ」と言う音がしそうな静寂の後、その言葉を聞いた。

「なんで手から出る赫子だけしか使わなかったの？の？ほかも使った方がインパクトあつてレート上がるんじゃない？『わざと使わないで凄いでしょ』とかやろうと考えてたかもしれないけどそんなのそもそも知らないんだからさござがわからないでしょ。」

「……ああーッ！しまったッ！」

「あんた、本当に馬鹿なんじゃないの？」

「だからあなたは……。」

　　侵食者も言う。皇帝も頭を抱えている。（蠍王だけがにこやかに笑っている。）

　　傷心状態になってから喋れるようになったのは5分後の話である。

「さて、ほかに質問はあるのかい？」

「吹っ切れたな。おい。じゃあ、CCG本部を襲ったとして表裏社会どっちともで、有名になったと思うんだけどどうする？」

「何もしないよ。」

「そうですか。まあ、いいや。」

「なんか悪い？」

「いや、何も。」

　　ため息をついてから烏がまた喋る。（まだ喋る、の間違いかもしれないが。）

「この後どんな行動とるの？」

「『あんでいく』っていうカフェに通って喰種と仲良くします。もしかしたらそこで雇われるかもしれない。」

「そうか。頑張っつてイッテネ。」

「もちろんここは捨てないから。なんか片言になるのやめて。といひかなんならここでも働けるよ。」

「いや、いらん。一人で十分。」

「あははははー！」

「んじゃ、頑張っつてください。」

「ありがとう。」

「では質問タイム終わり！飲みまくるぞ！」

「……死神が寝ている間何杯飲んだのだから。」

「うるさい。余計なことは突っ込むな、皇帝。」

「はははははは。」

「うるさいっ。」

こんな感じで夜が更けていった……。

EX1. 捜査官達の会話

「全くひどい目にあったもんだ。」

「全くです。あの人は一体何者だったのでしょうか？」

「あのボオ〜イ、必ず捕えてやろうではないか。」

特等捜査官二人と准特等捜査官一人はあの後、目の前に降って積もった瓦礫をどかして追いかけて、表に出たが、時既におすし、いや遅し、捜査官達は棒立ちで道路の奥を見つめていた。

その後、色々な人たちが現場検証をするために来たので上に引きあげ、取り敢えず無傷だったのでお寿司屋……ではなく、居酒屋で3人でお話をしているところである。

「まあ、取り敢えず報告書書かなければいけないはずなので、私が書きます。ので、情報を共有してください。」

「うん。その通りだな。」

「わかったよ、ジエントオルマウアン。」

烏龍茶を飲み干して、死神曰く「髪型が特徴的な」特等が喋り始めた。

「まずだな、報告によると、17時ちよつと過ぎにRCゲートをくぐった人がいたらしい。それが反応して騒ぎになったと。んで、仲間もいなさそうで赫子も出して行動してなかったから取り敢えず三級捜査官に腕試しとして行かせたけど負ける。で、その様子を監視カメラで見やばいと思った私が急いで向かって交戦。なかなか決着がつかず交戦中にあなた方二人が応援に来る。その際ポケットにある何かしらをいじった。そして3体1でも決着がつかなかった。そして約2分だったであろう時、天井を壊してその瓦礫で私たちを足止め、そして入り口まで逃げると。それで入り口に待機していた奴らもうまくあしらって、そこに乗り込んで来た車に乗り込み逃走、行方は未だ

知れず。的な感じらしいな。」

「そんな感じですね。」

「うん。そのとおりですね。」

他の二人は焼き鳥を食べながら聞いていた。

そして二枚目の準特等が口を開く。

「取り敢えずそいつに名前つけちゃいましょう。なんて名付けます？」

「うーん、特にないな。」

「えーとだ、やつは「Death」と名乗ったが、その名前を使うと士気が下がる気がするんだよ。だから、もつと別の名前を使うべきな気がするんだよ。」

「なるほど。」

「そこでだ、ふと今思いついたのは、CCGに、しかも本部にだ、単身で乗り込んで来たんだよ。よくわからない自己紹介はして、レートを上げるとか言い始める。はつきり言って頭がおかしいんじゃないかと思う。というかそもそも自分のことを「死」だとか「死神」だとかいうか？言わないだろ？ので、狂人という意味を込めて、「Luna」と名付けるのはどうだろう？丁度今、綺麗な三日月ぐらいだろうと思うけど。」

「まあ、いいんじゃないんでしょうか？」枝豆をつまみながら言う。

「異議なし。」同じく枝豆をつまみながら言う。

「じゃあ、それで書類は提出しておいてください。お願いします。」

「はい。わかりました。では、他に気づいたことがある人いますか？」

「あるよ、ボオーイ。」枝豆の殻を皿の端に置きながら言う。

「何でしょうか？」

「あのボオーイ、手から武器を出していたが何赫なのだろう？」

唐揚げを頼んだ髪型が特徴的な特等が口を開いた。

「多分、やつは赫者ですよ。手から出すと言うことは多分そう言うことですよ。つまりやつが本当は何赫かはまだ情報が皆無ということだな。もつというのと、やつがそのことに気づいているか、いないかで大きな差がある。もし気づいているのならワザと使わなかったとい

うことになり、結構脅威だな、ということになる。ちよつと待ってくれ、一口飲ませてくれ。」

一口烏龍茶を飲む。

「ぶはあー。んで、どちらにしろ言えることはやつは相当脅威だということだ。まず赫子が武器状だから他の喰種とは対処法が違い、どちらかといえば対人戦となる。さらに、武器が色々種類があり、しかも自由に出し入れできているからその対応も求められる。そして、実は普通の赫子を使えたらもっとヤバイ。プラスで今までの喰種のよくな対応もしなくてはならないからね。」

長く喋ったので、「はあ」と息をつく。

変なヒゲのおじさんが口を開く。

「うーん、なるほど。結構事態は深刻と考えてもいい、と。」

ハンサムなおじさんも口を開く。

「なるほど。備考欄に書いておきます。」

変な髪型のおじさんも口を開く。

「すいません！唐揚げ二つ、烏龍茶を一つ！んで、あなたたちは何飲む？」

テーブルに唐揚げ二つ、(もちろん、二つというのは、皿二つという意味だ。) 烏龍茶二つが乗っている。

話は色々進んでいるようだ。

んで、二枚目準特等捜査官が口をまた開く。

「では、話を続けます。もう一つ、奴が言っていた話です。」

頭が特徴的な特等捜査官も口を開く。

「なんかあったっけ？」

「はい。レートのことです。」

「なるほど。」

口調が特徴的な特等捜査官もしゃべり出す。

「別に、ポォーイが欲しがっていたS+でもいいんじゃないのかい？」

二枚目が頷く。

「はい、それでもいいんですけど何かできる気がするのです。そのために考えなければならぬのは、まずなぜレート上げにこだわるかです。」

「なるほど。」

髪のおかしい人が問う。

「んじや、君はどう考えるかい?」

二枚目が答える。

「力を誇示するためのものでしょう。」

髪のおかしい人が頷く。

「多分そうだ。車で逃げたということは元々仲間はあるんだろうかな。」

二枚目がそこで質問する。。

「つまり、仲間を増やすためのものでしょうか?」

髪型の変なおじさんが回答する。

「だろうな。つまり、高いレートを上げるとどうなる?」

髭の変なおじさんが割り込む。

「つまり、仲間が増えるということかな?」

「そういうことだと思う。つまりだ、高いレートをあげないほうがいいということだと思う。まあ、実際S+かSかと言われたら迷うところがあるし。書類の偽造にはならないでしょう。で、酷いことを言うと、S+にならなかったことを知ると、多分ヤケになってまたCCGに襲いかかってくるだろう。その時にまた戦ってデータを落とすことになるだろう。そうすれば勝てるだろうし、あわよくば生け捕りにして、クインケ製造させたいものだな。」

変な口調のおじさんが笑う。

「ハッハッハ。これは素晴らしい。なるほどなるほど。こうすればまたやつ、と言うかも「Luna」と呼んであげようじゃないか、Lunaとあって、戦って、勝つことができるのか。いい作戦だ。」

二枚目準特等が言う。

「まあ、必ず勝てるとは限りませんが。まあ、少なくとも今いった感じのことを踏まえてまとめて置きます。」

「よろしく頼む。」

最後の唐揚げをつまみながら髭と口調が特徴的な特等捜査官が頼む。

「わかりました。協力してくださいありがとうございます。」

二枚目な準特等捜査官がお礼を言う。

「あ、そういえば喋ってばかりで、俺あんまり唐揚げ食ってないんだけど……。まあいい、すいません！唐揚げ一つ！」

髪型のおかしい勘の良さそうな特等捜査官が叫び、注文した。

そんな感じで田中丸望元特等捜査官と、篠原幸紀特等捜査官と、法寺項介準特等捜査官は、楽しく居酒屋でお酒を飲んだ……。訳ではなくて、居酒屋でお酒ではなく烏龍茶を飲んで、楽しく情報共有して食べ物喰ったとき……。ではなく喰ったとき。